

## 穂高古墳群 C2号墳1

---

宅地造成に伴う第1次発掘調査報告書

2022.3

安曇野市教育委員会

## 穂高古墳群 C2号墳1

---

宅地造成に伴う第1次発掘調査報告書

2022.3

安曇野市教育委員会

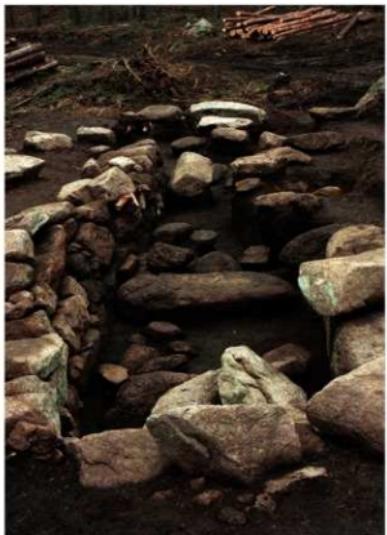
表紙写真　　穗高古墳群 C 2 号墳出土フラスコ形長頸瓶  
裏表紙写真　　穗高古墳群 C 2 号墳石室調査状況



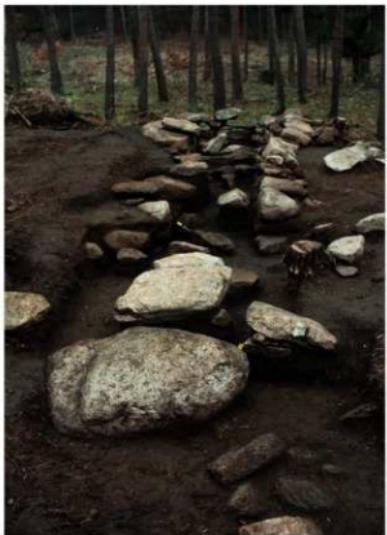
1 穂高古墳群 C2 号墳石室（南から）



2 穂高古墳群 C2 号墳石室（南から）



3 石室検出状況（北から）



4 石室・前庭部検出状況（南から）



5 穂高古墳群 C2 号墳出土遺物

# 序

埋蔵文化財は、安曇野市の過去の人々の暮らしや文化、歴史を理解するためにはかけがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査成果の公開普及に努めています。

本書では、平成7年度（1995）に穂高有明の宅地造成に際して実施した、穂高古墳群C2号古墳の発掘調査の成果をまとめました。穂高古墳群は、安曇野市穂高有明・穂高牧地区とその周辺に所在する6世紀から8世紀にかけて築造された古墳群で、80余基の円墳が沢筋に群をして分布しています。この古墳群は、県下でも有数の古墳時代後期の群集墳のひとつとして、全国的にも類例の少ない金銅製鳳凰形飾板が副葬されるなど貴重な資料も出土しています。今日まで、市民の皆様のご協力とご理解に支えられて古墳と出土遺物の保存も進んでいます。

本書に掲載した発掘調査では、全長7.6mの横穴式石室を検出し、直刀、鉄鎌、須恵器等が出土しました。穂高古墳群としては13基目となる石室調査がなされ、安曇野市教育委員会が平成27年度（2015）に発行したG1号墳（上原古墳）、令和2年度（2020）に発行したE13号墳（浜場塚）に続く報告書として、本古墳群の特性を解明する貴重な資料を得ることができました。なお、今回発掘調査を行った古墳そのものは、調査後に、石室の壁材の一部を残して姿を消してしまいました。

この発掘調査は、関係者の方々の理解あるご協力を得て行われ、諸機関にご支援とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申しあげます。

私たちは、今後も貴重な埋蔵文化財が適正に保護されていくことを願っています。本書掲載の調査成果が多くの方々に活用され、豊かな文化都市として、後世にも繋がっていくことを祈念し序といたします。

令和4年（2022）3月

安曇野市教育委員会  
教育長 橋渡 勝也

## 例言

- 1 本書は、長野県安曇野市（旧南安曇郡穂高町）で平成7年（1995）に実施した、穂高古墳群C2号墳第1次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、旧穂高町教育委員会が実施し、事業者及び安曇野市が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は臼居直之、土屋和章が担当し、中谷高志が統括した。また、報告書作成全般にわたって発掘担当者の山下泰永の教授を得た。
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。
- 5 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 6 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。（敬称略・五十音順）  
大澤慶哲、桐原健、島田哲男、白鳥章、鈴木敏則、寺島俊郎、直井雅尚、原明芳、廣田和穂、松田幸子、百瀬新治、森義直、山田真一

## 凡例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットを遺物注記等に使用した。  
穂高古墳群 C2号墳第1次発掘調査：C2
- 2 土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。例 高坏形土器：高坏
- 3 土層及び土器の色調は農林水産省農林技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」に準じた。
- 4 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧都名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」「穂高町」のように表記した。
- 5 本書掲載の地形図は、安曇野市都市計画基本図（1/2,500）を基図とし、調製した。
- 6 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。  
埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委
- 7 横穴式石室の部位名称は、文化庁文化財部記念物課監修「発掘調査のてびき 各種遺跡調査編」図28（P.30）に従った。

# 目次

## 序

### 例言・凡例

### 目次・挿図目次・挿表目次・写真図版目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 事業計画の概要	2
3 調査の経過	4
4 調査体制	4
5 発掘作業・整理作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の位置	6
2 地理的環境	6
3 歴史的環境	8
第3章 調査の方法	19
第4章 層序	22
1 層序と土質	22
第5章 遺構	24
1 石室・墳丘検出状況	24
2 遺物検出状況	34
第6章 遺物	36
1 須恵器・土師器	36
2 金属器	37
3 石器	37
第7章 調査の総括	42
1 横穴式石室の構築と墳丘盛土	42
2 C2号墳出土遺物から見るC群の築造・稼働期と被葬者の属性	48
写真図版	54
引用・参考文献	59
調査報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 調査位置図	1	第15図 石室実測図	31
第2図 調査前の穂高古墳群C群	2	第16図 石室床面・断面実測図	32
第3図 C2号墳の位置（調査時）	3	第17図 石積み構造図	33
第4図 C2号墳の位置（現在）	3	第18図 遺物出土状況	35
第5図 穂高地域を流れる河川の傾斜	7	第19図 出土遺物1	38
第6図 安曇野市と周辺の古墳・古代集落遺跡	14	第20図 出土遺物2	39
		第21図 C2号墳石室築造模式図	45
第7図 穂高古墳群	16	第22図 穂高古墳群と周辺古墳の横穴式石室1	46
第8図 富士尾沢とC群の分布	17		
第9図 C群とB群（天満沢川右岸）の垂直分布	18	第23図 穂高古墳群と周辺古墳の横穴式石室2	47
第10図 グリッド配置図	20	第24図 出土遺物群区分図	49
第11図 調査区全体図	21	第25図 穂高古墳群を中心とする	
第12図 基本層序	23	出土金属器にみる段階区分	50
第13図 石室検出図	29	第26図 周辺古墳出土遺物1	52
第14図 土層断面図	30	第27図 周辺古墳出土遺物2	53

## 挿表目次

第1表 事務手続き経過	4	第4表 出土土器類観察表	40
第2表 安曇野市と周辺の古墳・古代集落遺跡	13	第5表 出土金属器観察表	41
		第6表 出土石器観察表	41
第3表 穂高古墳群C群	18	第7表 終末期古墳出土金属器一覧表	51

## 写真図版目次

1 調査状況1	54	4 出土遺物1	57
2 調査状況2	55	5 出土遺物2	58
3 調査状況3	56		

# 第1章 調査の契機と経過

## 1 調査の概要

穂高古墳群 C2号墳（以下、「C2号墳」とする。）発掘調査

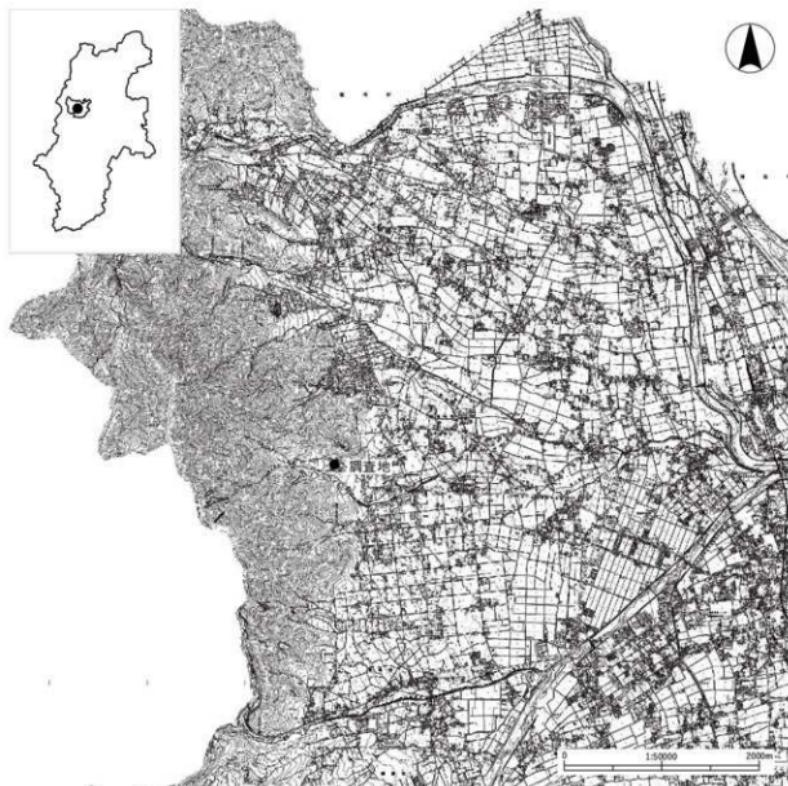
所在地 長野県安曇野市穂高有明3629番5外

調査面積 300m<sup>2</sup>

発掘作業 平成7年（1995）3月6日～平成7年（1995）4月7日

整理作業 令和3年（2021）2月15日～令和4年（2022）3月31日

調査契機 宅地造成



第1図 調査位置図

## 2 事業計画の概要

安曇野市穂高有明の山林地域は、1960年代から別荘分譲地として開発され、以後県道25号をはじめとする道路整備、温泉・宿泊施設等の建設が進み、一帯は観光・商業地となっている。

平成6年（1994）9月に開発事業者から別荘地造成の打診があったところ、予定地内に3基の古墳が存在していることを確認していたため保護協議を開くよう指導した。同年10月に、現地において第1回保護協議を開催し、「C1・6号墳の2基については緑地帯に属することから現状保存」「C2号墳については保存が難しいため、記録保存」することを決定した。同年11月に第2回保護協議を行い、C2号墳の記録保存に向けた発掘調査の打ち合わせをした。C2号墳は、後世の盗掘や開発、樹木の育成等により石室が露頭し、天井石や羨道部など欠落や崩落が認められていたが、石室形状や規模が確認でき、墳丘構築土が明瞭に残されていた。この現状を踏まえ、協議を経て、平成7年（1995）3月3日付「発掘調査委託契約書」に基づき3月6日～4月7日に発掘調査を実施した。



C1号墳



C2号墳

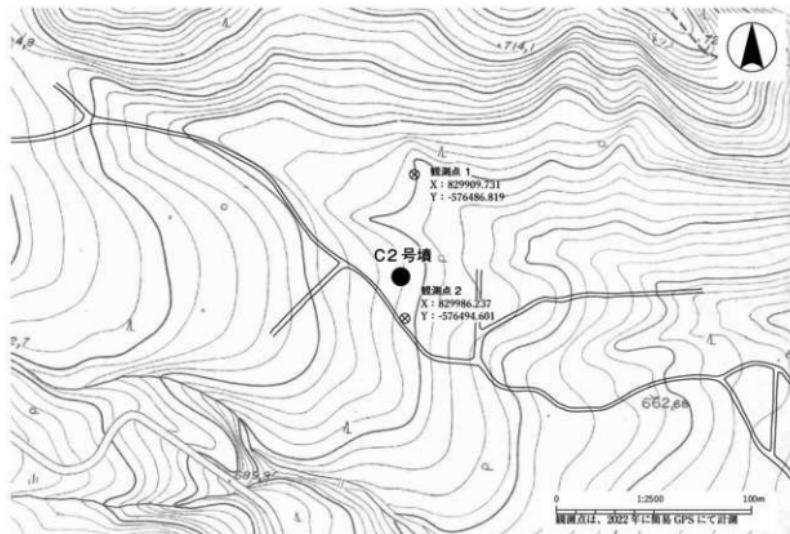


C3号墳

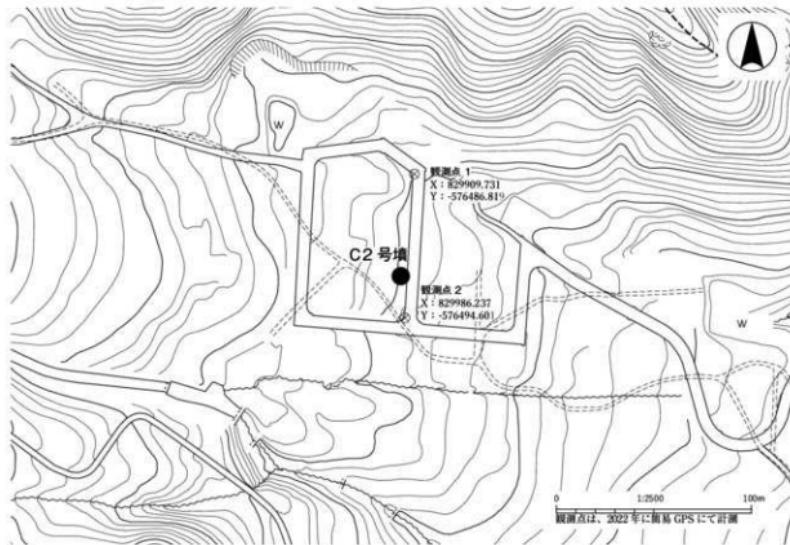


C5号墳

第2図 調査前の穂高古墳群C群（穂高町ほか1989から転載）



第3図 C2号墳の位置（調査時）（穂高町全図（昭和49年2月測図）に加筆）



第4図 C2号墳の位置（現在）

### 3 調査の経過

C2号墳発掘調査は、別荘分譲予定地での緊急発掘調査で、調査原因となる事業の工事主体者は民間事業者である。平成6年（1994）に遺跡保存の事前協議を行い、平成7年（1995）3月に工事主体者と穂高町教育委員会との委託契約を締結した。

第1表 事務手続き経過

年月日	文書番号	内容
1 平成6年9月		事業者から開発の打診があり、保護協議開催を指導する。
2 平成6年10月		第1回保護協議を現地にて実施する。
3 平成6年11月		第2回保護協議を現地にて実施する。
4 平成6年12月6日		C2号墳発掘調査の実施承諾を事業者から得る。
5 平成6年12月7日		事業者から「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出される。
6 平成6年12月7日	6 穂教第120712号	町教委教育長から文化庁長官あてに「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を発送する。
7 平成7年3月3日		事業者と町教委で、発掘調査委託契約を締結する。
8 平成7年3月22日	6 教文第5-334号	県教委教育長が町教委教育長及び事業者あてに「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を発出する。
9 平成7年3月6日～ 平成7年4月7日		発掘調査を実施する。
10 平成7年4月7日	6 穂教第120712号	「発掘調査終了届（通知）」を町教委教育長から県教委教育長に提出する。
11 平成7年4月7日	6 穂教第120712号	「埋蔵文化財の拾得について（届）」を町教委教育長から農科警察署長に提出する。
12 平成7年4月7日	6 穂教第120712号	「埋蔵文化財保管証」を町教委教育長から県教委教育長に提出する。

### 4 調査体制

#### （1）発掘作業

期間	平成7年（1995）3月6日～平成7年（1995）4月7日
調査主体	穂高町教育委員会
事務局	穂高町教育委員会 社会教育課
教育長	清澤 久
担当者	山下泰永
作業参加者	飯沼達治、宇留賀峰作、重野昭茂、相馬幸男、竹岡喜恵人、竹岡喜久雄、田中基義、深澤貞臣、深澤恒則、藤沢二雄、矢口健陽児

## (2) 整理作業

期間	令和3年（2021）2月15日～令和4年（2022）3月31日
調査主体	安曇野市教育委員会
事務局	安曇野市教育委員会 教育部 文化課
教育長	橋渡勝也
文化課長	山下泰永
文化財保護係	中谷高志（係長）、土屋和章、横山幸子（～令和2年度）、齊藤雄太（令和3年度～）
作業参加者	白居直之、田多井智恵、宮下智美、望月裕子

## 5 発掘作業・整理作業の経過

C2号墳の発掘調査における現場での作業は、平成7年（1995）3月6日～4月7日に実施した。墳丘と認識できる小丘の盛り上がりと石室及び周辺の構築石材の広がりを捉え、調査範囲を確定した。調査範囲の敷払い、立木の伐採をし、石室周縁から表土を除去して周辺精査を行った。石室内には2か所に径約50cmのアカマツの立木が生えるなど、立木の根により石積みと墳丘の変形がみられた。石室内中位まで表土を除去した後、根の処理をしつつ掘り下げをおこなった。石室掘り下げと並行して墳丘面の精査を行い、東西の側壁に直交するトレンチと奥壁に直交するトレンチを設定し、墳丘構築土の掘り下げを行った（3月13日）。墳丘面に検出された石材の散在状況の記録をとり、石室内の崩落砾を除去しつつ下層への掘り下げを行った。主体部の掘り下げに際しては、石室壁の石積み、埋土堆積の状況の観察・記録をした。前庭部から須恵器の破片、金属器が検出され、出土遺物の記録作成後に取り上げを行った（3月14日）。石室内崩落石材の状況を確認しながら下層面までの掘り下げを完了し、下層面と側壁の精査を行い、状況を記録した（3月28日）。墳丘断面を記録し後、石室の一部を解体し、墳丘構築土層を確認した。墳丘及び石室の整地をして4月7日に調査を終了した。

整理作業は、平成7年（1995）度に土器の洗浄、注記、接合を終了し、金属器の仮保存をした。金属器は、令和元年度までに専門業者への委託業務として保存処理を随時終了させた。令和3年（2021）度に、図面整理、遺物実測図の作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置

穂高古墳群は長野県安曇野市穂高地域とその周辺にあり、飛騨山脈 東麓の扇状地上に位置する（第7図）。山麓から犀川に至る安曇平と呼ばれる平坦地は、黒沢川、烏川、中房川と複数の沢による複合扇状地によって形成され、古墳時代以来の河川開発と近世の灌漑用水整備により、豊かな穀倉地帯として発展している。山麓沿いには古墳時代後期に属する古墳が、単独墳もしくは群集墳として、北は北安曇郡松川村から南は安曇野市猪蹄地域の南北約10kmにわたって現在80基余りの古墳の分布が確認できる。本古墳群のうち穂高有明に密集している支群は、明治時代以来、「有明古墳群」と呼称され、その存在が知られた古跡として県内でも注目されてきた古墳群の1つである。

山麓に展開する穂高古墳群は、河川と沢筋の流域ごとに5つの群と3基の単独墳から構成される。今回、発掘調査を行ったC2号墳は、富士尾山から下流する北富士尾沢と南富士尾沢が合流・分岐する傾斜部に立地するC群に属し、C群7基<sup>1</sup>の中では2番目に高い標高680mに位置する。現在、本古墳は、発掘調査終了後に、腰石となる西側壁を残し宅地として整地されている。

### 2 地理的環境

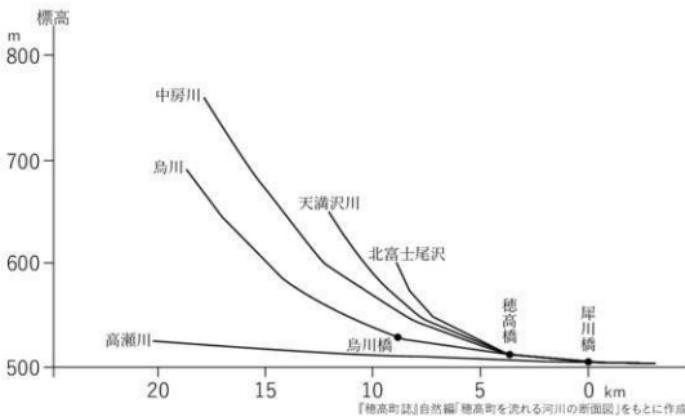
#### (1) 地形

日本列島を東西に分断する糸魚川-静岡構造線は、その西側が隆起して飛騨山脈をはじめとする高山帯を形成し、東側は陥没して松本盆地・諏訪盆地などの低地を形成している。さらに、飛騨山脈を侵食して東に流下する複数の河川によって山麓斜面には広く扇状地が発達する。安曇野市内の主な河川は、高瀬川、中房川、烏川、黒沢川が挙げられ、南北に並んで複合扇状地を形成している。烏川・中房川が合流した穂高川と、盆地北域の大町市方面から安曇野市に向かって南流する高瀬川は、松本盆地南部域から北流する犀川と安曇野市明科地域で合流して、長野盆地に至る。

安曇野市西麓の扇状地は、主に中房川と烏川の河川堆積物によって形成されている。中房川扇状地は、標高750mの宮城を扇頂として、北は松川村 猫穴、南は小岩岳の南方から広がり、扇端は、乳川の右岸に沿って発達する低位段丘崖となる。中房川扇状地の面積は、約23km<sup>2</sup>に及び、穂高有明地域の平坦面のほぼ全域を占めている。この扇状地は、山地を出てから広角で広がり、平地に押し出している（穂高町誌刊行会1991b）。烏川扇状地は、標高750mの須ヶ渡を扇頂として、北側を中房川扇状地と接し南は堀金三田の田多井付近で黒沢川扇状地と重なる。

本古墳が帰属するC群は、中房川と烏川の中間に位置し、複数の沢の山麓押出部にあたる。飛騨山

1 穂高古墳群C群は、7基が古墳として登録されている。このうちC6・C7号墳については、花崗岩の大形角礫が並ぶ状況や散在して積みあがる状況などを確認したものの、石室とする確認は得られなかった。現地踏査の結果、古墳とするには判然としない面もあるが、本書ではC群を7基とする。



第5図 穂高地域を流れる河川の傾斜

脈の前山である富士尾山（1,296m）から急勾配で下流する沢には、<sup>たかのさか</sup>滝ノ沢、北富士尾沢、南富士尾沢、<sup>たきのさか</sup>桐ノ沢等があり、北富士尾沢と南富士尾沢が合流して富士尾沢川となる（第8図、穂高町誌刊行会1991b）。C群は急斜面に立地し、周辺では沢によって運ばれた花崗岩砂礫とともに3～5mに及ぶ巨礫を見ることも稀ではない。これらの沢は標高600m前後で、用水堰となっているが、流路は、有明山をはじめとする風化しやすい花崗岩地帯を流れるため、多量の砂が下流域に堆積している。現在も、土砂流出を抑制する砂防施設が要所に建設されている。

## （2）地質

安曇野市西山山麓には、中房川と烏川をはじめ複数の河川によってもたらされた巨礫が分布している。  
燕岳に源を発する中房川は、有明山をはじめとする前山の花崗岩地帯を流下して乳川と合流する。中房川の支流及び上流域では激しい浸食により急峻な地形をつくりだし、多くの部分で基盤岩が露出し、河床礫は大形となっている。富士尾沢川以北の扇頭部付近には、3mをこえる花崗岩がみられ、古墳石室の構築材となっているばかりでなく、近年も土台・門柱など建築材として加工利用されている。中房川扇状地扇頭部周辺の山麓は、傾斜面の土砂の堆積が著しく、黒褐色粘土及び黑色粘土に、砂礫の混じる橙褐色土が互層になっている。

本古墳群A・B・C群の石室構築石材である大形の花崗岩は、急峻な燕岳及び前山を供給源として中房川、<sup>てんまきやま</sup>天満沢川・富士尾沢川等によって山麓・扇央に分布している。一方、烏川扇頭部に分布するE・F・G群の構築石材は、1m前後の花崗岩と砂岩・粘板岩等の中小礫が混在している。これらは石材の供給源である蝶ヶ岳・大滝山・鍋冠山が、粘板岩・砂岩・チャート・ホルンフェルスなど中古生層の山地地質の影響によるもので、烏川河床と扇状地に広がっている。

### 3 歴史的環境

徳高古墳群にかかる安曇野市とその近隣地域の古墳～奈良・平安時代の遺跡について概観する。安曇野市は、飛騨山脈東麓および複数河川によって形成された複合扇状地域（西側山麓域）と南北に流れる犀川を隔てて、筑摩山地西麓及び犀川の河岸段丘地域（東側山麓域）に立地している。平成17（2005）年に5町村が合併して誕生した安曇野市は、前者の地域が旧南安曇郡穂高町・堀金村・三郷村と豊科町の犀川左岸域、後者が豊科町の犀川右岸域と旧東筑摩郡明科町の地籍にあたる。安曇野市内の遺跡番号は、旧町村の通し番号を踏襲し、豊科地域を1、穂高地域を2、堀金地域を3、三郷地域を4、明科地域を5として、頭に付している。また、本古墳群は本市域内にある史跡ばかりでなく、隣接する松本市梓川・島内・島立・新村地区、北安曇郡松川村・池田町にある古墳・集落跡の構成や稼働時期、出土遺物等において共通点が多く、政治・社会的な動向と背景を考察する上で参考となる。

安曇野市の「安曇」の地名は、7世紀の郡制によって成立した科野国「安曇郡」と安曇郡の地に居住し繁栄した「安曇氏」に由来している。郡名と安曇氏の初見は、天平宝字8年（764）10月の正倉院御物布袴墨書銘で、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊調布壱端（後略）」とあることが知られている。

「安曇郡」については、『和名類聚抄』高山寺本に、郡内の郷として「安曇郡、高家<sup>アカミ</sup>、八原<sup>ハラ</sup>、前科<sup>マサキ</sup>村上」とあり、同書流布本には「安曇郡、高家<sup>アカミ</sup>、矢原<sup>ヤハラ</sup>、前社、村上<sup>マサキ</sup>」とある。奈良時代までには、信濃国安曇郡そして4郷が成立していたことがわかる。この4郷の所在については諸説あるが、高家は、松本市梓川・島内、本市三郷・豊科・明科辺り、八原は、安曇野市堀金・穂高辺り、前科は、安曇野市明科地域の一部と北安曇郡池田町・松川村、大町市南東部辺り、村上は、大町市及び北安曇郡白馬村辺りと推測されている（南安曇郡誌改訂編纂会1968）。穂高古墳群の築造、稼働した頃は古代律令国家による地方行政整備と重なり合う時期である。

#### （1）集落跡・窯跡（第2表、第6図）

本古墳群築造と関連する集落遺跡は、西側山麓・沖積地域（犀川左岸）10か所、東側山麓段丘域（犀川右岸）及び押野山山麓東側8か所の遺跡において、発掘調査により多数の堅穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されている。合併以前に各市町村で行われた発掘調査の内容については未報告のものもあり、詳細不明な点もあるが当該期の集落は、西側山麓域の烏川扇状地、扇央下部の万水川左岸の自然堤防から南西に広がる微高地上と犀川右岸の南北に細長く広がる河岸段丘の2地域に展開している。

西側山麓・沖積地域の集落跡は、矢原地籍を中心とする矢原遺跡群<sup>1</sup>としている範囲にあり、1980年代後半以後の発掘調査において遺構検出が顕著となっている<sup>2</sup>。藤塚遺跡（2-38）での古墳時代後期の堅穴建物跡30棟、掘立柱建物跡9棟（穂高町誌編纂委1991a）、穂高神社境内遺跡（2-36）での古墳時代後期～奈良時代前半期の堅穴建物跡2棟（安曇野市教委2018）をはじめ、矢原五輪畠遺跡（2-48）（穂

1 本書における「矢原遺跡群」の範囲は、「安曇野市の埋蔵文化財第21集」（安曇野市教委2020）の「第8章 調査の総括」における「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」とした内容に拠る。

2 各遺跡の調査成果の概要については、調査担当者である山下泰永の所見に拠る。

高町教委1987)では、古墳時代前期～後期の竪穴建物跡5棟、奈良～平安時代の竪穴建物跡9棟、矢原宮地遺跡(2-49)からは、古墳時代後期の竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡3棟、平安時代の竪穴建物跡4棟、掘立柱建物跡1棟、馬場街道遺跡(2-53)(穂高町教委1987)では、古墳中・後期の竪穴建物跡5棟を含め奈良・平安時代までの竪穴建物跡が11棟と掘立柱建物跡1棟、中在地遺跡(2-58)では、古墳時代後期の竪穴建物跡5棟、奈良～平安時代の竪穴建物跡21棟、ハツ口遺跡(2-56)では、奈良～平安時代の竪穴建物跡18棟、堀立柱建物跡5棟、三枚橋遺跡(2-47)(安曇野市教委2020)では7次に及ぶ調査の成果として、奈良～平安時代の竪穴建物跡47棟、掘立柱建物跡13棟が検出され、等々力町市上巾下遺跡(2-35)、南原遺跡(2-43)(穂高町教委2001b)では、古墳～平安時代の竪穴建物跡が数棟検出されている。平安時代のみの集落遺構検出遺跡は、吉野町館遺跡(1-22)、荒井遺跡(1-5)、梶海波遺跡(1-6)などがあり、扇状地扇央部へ集落の広がりをみせる。山麓域では、堀金小学校付近遺跡(4-24)、三角原遺跡(3-14)がある。古墳～奈良時代の遺物が確認されている遺跡は、耳塚遺跡(2-10)、壇下遺跡(2-21)、辻遺跡(2-31)、北才の神遺跡(2-37)、四反田遺跡(2-51)、柏原遺跡(2-57)、堀之内遺跡(2-59)、矢原巾上遺跡(2-60)があり、平安時代の遺物出土は、豊科地域で5遺跡、原村遺跡(1-16)、町田遺跡(1-14)、本村遺跡(1-7)、柳原遺跡(1-8)、大海渡遺跡(1-9)、姥ヶ池遺跡(1-10)、成相遺跡(1-11)と広範囲にわたっており、穂高地域で16遺跡となっている。この遺跡分布状況は、従来からの指摘どおり、古墳時代後期には矢原遺跡群に中核集落が営まれ、奈良時代までには郡衙などの地方行政施設があった可能性の高さを示している。また、平安時代前半を画期として、平安時代中頃には扇央部、山麓に集落が拡散していく状況がみられる。今後も矢原遺跡群を主とする微高地域から古墳・奈良時代の集落遺構が数多く検出されることが予想される。

東山山麓・河岸段丘域では、犀川と穂高川の合流域付近の段丘において、古墳時代前期から奈良・平安時代まで継続する遺跡がいくつかある。この地域で注目すべきは、7世紀後半～8世紀初頭に創建されたと推定される明科遺跡群明科庵寺(5-409)とその周辺の明科遺跡群である。明科遺跡群栄町遺跡(5-411)(安曇野市教委2013・2014)では古墳時代後期の竪穴建物跡18棟、掘立柱建物跡6棟のほか溝・土坑が検出され、明科遺跡群古殿屋敷(5-413)では古墳時代前期・後期～奈良・平安時代の土坑等があり、明科遺跡群上郷遺跡(5-407)、明科遺跡群県町遺跡(5-410)、明科遺跡群本町遺跡(5-414)からも古墳時代前期～平安時代の遺物が確認できる。上生野遺跡(5-517)(明科町教委1995)では古墳時代前期の竪穴建物跡、掘立柱建物跡が各2棟、平安時代の竪穴建物跡5棟が、潮遺跡群潮神明宮前遺跡(5-501)(明科町教委2000)では古墳時代前期の竪穴建物跡4棟、平安時代の竪穴建物跡36棟が、ほうろく屋敷遺跡(5-101)(明科町教委1991)では平安時代の竪穴建物跡20棟、掘立柱建物跡1棟、潮遺跡群塙田若宮遺跡(5-512)では、古墳時代と推定される竪穴建物跡1棟が検出されるなど犀川河川沿いに中核集落が点在している。祭祀関連遺跡としては明科遺跡群龍門淵遺跡(5-412)があり、こや城遺跡(5-415)、上手屋敷遺跡(5-404)、みどりヶ丘遺跡(5-209)から古墳時代前期～後期の遺物が出土し、弥生時代から継続する遺跡でもある。奈良時代以降でも明科庵寺を含めた市街地及び、犀川流域の全域から土師器・須恵器が出土し、継続する集落となっている。

集落遺跡に加え、筑摩山地には、須恵器窯跡群として筑摩東山窯跡群(古くは芥子坊主山窯跡群)

と呼ばれる須恵器、土師器、瓦の生産を展開した窯跡群がある。上ノ山窯跡群（1-13）、菖蒲平窯跡群（1-12）では、8～9世紀の窯跡が17基と竪穴建物（工房）跡26棟が検出され（農科町教委1999）、さらに南の山中に田溝池窯跡群、田溝窯跡群、中の沢窯跡群、フリアン沢窯跡群、山田窯跡群が分布し、隣接する松本市岡田地区の塙辛遺跡では7世紀に遡る窯跡の存在を裏付ける須恵器が出土している。この筑摩東山窯跡群で生産された須恵器は、安曇・松本地域に供給されていることが明らかになっている。犀川右岸の河岸段丘上に営まれた明科地域の集落と対峙する左岸の塙川原地籍に桜坂古窯跡（5-212）がある。桜坂古窯跡では、須恵器、瓦の生産とともに鷦尾も確認され、窯に関わる竪穴建物跡出土の須恵器から7世紀末～8世紀前半の操業が推定されている。さらに押野山山麓の東側斜面には宮原古窯跡（5-204）がある。

## （2）古墳

穂高古墳群と周辺の古墳分布について、古代の安曇郡内という視点から、本市に北接する松川村から南接する松本市梓川地区までの西山山麓域に立地する古墳分布域①と、犀川右岸の河岸段丘・筑摩山麓に立地する古墳分布域②、高瀬川左岸の中山丘陵西麓に立地する古墳分布域③、の3地域について概観する。

古墳分布域①は、穂高古墳群が所在する地域で、東方に犀川、高瀬川、筑摩山麓を一望できる一帯に分布している。この地域の古墳立地は2基の古墳（G1号墳、H1号墳）以外全て標高600m以上の扇頂部に位置し、河川氾濫域にはない（第6図）。山麓北側の北安曇郡松川村には、祖父が塚（M1）、桜沢おかめ塚（M2）、牛塚（M3）の単独墳として3基が確認され、鳥奴遺跡（M4）周辺に古墳の存在をうかがわせる遺物の出土がある。このうち祖父が塚古墳は、一部損壊しているが埴丘・石室の規模と構造、出土遺物の確認ができる古墳であり、本地区が穂高古墳群の一角をなしたと考えている。穂高地域に所在する穂高古墳群は、河川・沢沿いに、8群に分類される。内訳は、北からA群8基、B群32基、C群7基、E群17基、F群10基の複数古墳のグループと単独で立地するD・G・Hの3基の古墳となる<sup>1</sup>。烏川右岸に所在する堀金地域には、F群の南に展開する古墳が須砂渡口南古墳、岩原古墳、前の髪古墳、古城下古墳の4基と曲尾古墳群1つがある。この地区で規模、遺物などの情報が把握されている古墳は、前の髪古墳1基である。さらに南側の三郷地域には北小倉1・2号墳を含めた5基が古墳もしくは土饅頭状の小墳丘として確認されているが、今のところ埋葬施設をもつ構築物との確認はない。また、山麓南端の松本市梓川地区でも3基ほどの土饅頭状の小墳丘についての記録があるが、これも三郷地域と同じ状況である。現状では、堀金地域南域から梓川地区的黒沢川、鳴沢川扇状地に古墳はみあたらぬい。

古墳分布地域②の明科地域では、金山塙古墳（潮1号墳）をはじめとする潮古墳群8基、能念寺古墳群3基、武士平古墳群2基、上郷古墳の13基が確認されている。注目すべきは潮古墳群で、6・7・

<sup>1</sup> 穂高古墳群の古墳数については、満足して文献上でしか確認できないもの、満足したが遺物出土によって確実に存在の確認があるもの、踏査によって新発見の古墳と認識されるものなどがあり、文献により異なる数値となっている。ここでは、穂高町誌編纂委員会刊行『穂高町誌』（穂高町誌編纂委員会1991a）に掲載された古墳数とした。『安曇野市埋蔵文化財第8集』（安曇野市教委2015、第12表（p.32））を参照されたい。

8号墳の調査が行われ、いずれも明確な周溝をもつ古墳であり、横穴式石室の下面までの削平があったにもかかわらず主体部と周溝内から須恵器を主体とする多量の遺物が検出され、副葬品の質・量とともに地域の中心であったであろう氏族の存在をうかがうことができる。特に6号墳の周溝内と羨道から出土した須恵器には7世紀中葉以後の坏蓋、高杯、長頸壺などが含まれ、8世紀前半の坏蓋、坏、平瓶等が主体を占め、金属器、玉類などの出土もあった（明科町教委2000）。1号墳である金山塚は、明治45年（1911）頃に発掘調査され、径20m、高さ0.7mの円墳で、直刀、刀子、轡などの出土が報告されている（明科町史編纂委1984）。

古墳分布域③は、北安曇郡池田町の高瀬川左岸と明科地域の犀川左岸に所在する古墳である。池田町の遺跡分布調査（池田町教委1994）と出土遺物、現地踏査から少なくとも7基の古墳が確認できる。石室構造がわかる古墳は鬼の釜古墳1基のみであるが、周辺にある篠塚古墳と塚穴遺跡を含めた3基が1つの古墳群であったと考えられる。ほかの4基は単独墳で、直刀等が出土している古墳もある。明科地域では、高瀬川と犀川の合流する左岸段丘の東側山麓裾部に石室の一部とされる痕跡を残す上野屋敷古墳が1基あるのみで、犀川左岸沿いに古墳はない。

弥生時代後期～古墳時代前期の西山山麓・沖積地帯では、発掘調査による当該期の遺物採集が増加傾向にあるものの、集落跡と認識できる遺構はきわめて少ない。沖積地の事例では、三枚橋遺跡（2-47）に弥生時代後期の竪穴建物跡数棟と矢原五輪畠遺跡（2-48）に古墳時代前期竪穴建物跡3棟があるのみで、分布は希薄である。また、山麓域からは、三郷地域の山の越遺跡に古墳時代前期初頭の高坏と甕2点の完形品出土があるが、遺構は未確認である。犀川右岸の河岸段丘域では、町田遺跡（1-14）、光遺跡群北村遺跡（5-301）に弥生時代後期の竪穴建物跡があり、古墳時代前期の集落としては、上生野遺跡（5-517）、潮遺跡群潮神明宮前遺跡（5-501）、明科遺跡群古殿屋敷（5-413）で竪穴建物跡が検出された。この時期の集落は、単独の小規模集落として点在し、集落の継続性はないといわれる。

古墳時代中期に至っては、馬場街道遺跡（2-53）の竪穴建物跡2棟、明科遺跡群龍門淵遺跡（5-412）の祭祀遺構があるものの、東西山麓域とともに土師器が散見される程度で集落の痕跡を見つけることが困難である。近年の沖積地の発掘調査において、旧地形の微高地と低地が洪流水堆積物によって深く埋没している状況がいくつか報告され<sup>1</sup>、今後の調査によって、集落遺構が見つかる可能性は高いものの、現況では地形の安定した沖積地の微高地と犀川の右岸河岸段丘に7世紀以降に集落が展開、拡大している様子がうかがえる。

安曇野市域は、近隣の松本・大町地域と比較すると、弥生時代後期～6世紀中頃は、居住が希薄な場所で、6世紀後葉から定住が始まり、7世紀には沖積微高地（矢原遺跡群）と河岸段丘（明科遺跡群）を中心とした大集団が出現したことになる。そして、この地域の集団は、7世紀後半～8世紀初頭に100余基に及ぶ古墳群を築造するまでに繁栄し、律令国家の地方組織に取り込まれていくようになったと推測される。

<sup>1</sup> 芝宮南遺跡（G1号墳から1.2km東）では、現地表面下200cmの深度で弥生土器が検出された（安曇野市教委2016）。南原遺跡では、地表面下25cmで弥生土器が検出された地点と、そこから約10m離れた地点の120cm深度で須恵・土師器片が検出された事例がある（穂高町教委2001b）。

## (3) 穂高古墳群とC群(第3表、第7・8・9図)

穂高古墳群は、立地を觀点として河川の流域ごとに分布域の区分けをし、単独墳を含めてA~Hの8群に分けている。複数の古墳が分布する支群として、中房川左岸・油川流域のA群8基、天満沢川流域左岸・右岸のB群32基、富士尾沢川流域のC群7基、烏川左岸のE群17基、烏川右岸のF群10基があり、単独墳として、D1号墳(魏石鬼窟<sup>1)</sup>)、H1号墳(大塚様)、G1号墳(上原古墳)の計77基が確認されている。この77基のうち、石室構造もしくは出土遺物の帰属が明確で、記録がある古墳は、A群2基、B群3基、E群3基、F群3基、D1号墳、G1号墳の13基であり、同じ山麓域の堀金地域にある前の髪古墳、松川村祖父が塚古墳の2基を加えても15基と、調査資料・記録が乏しい状況である。C群の古墳については、石室及び出土遺物についての記録はなく、本調査が初めてとなる。

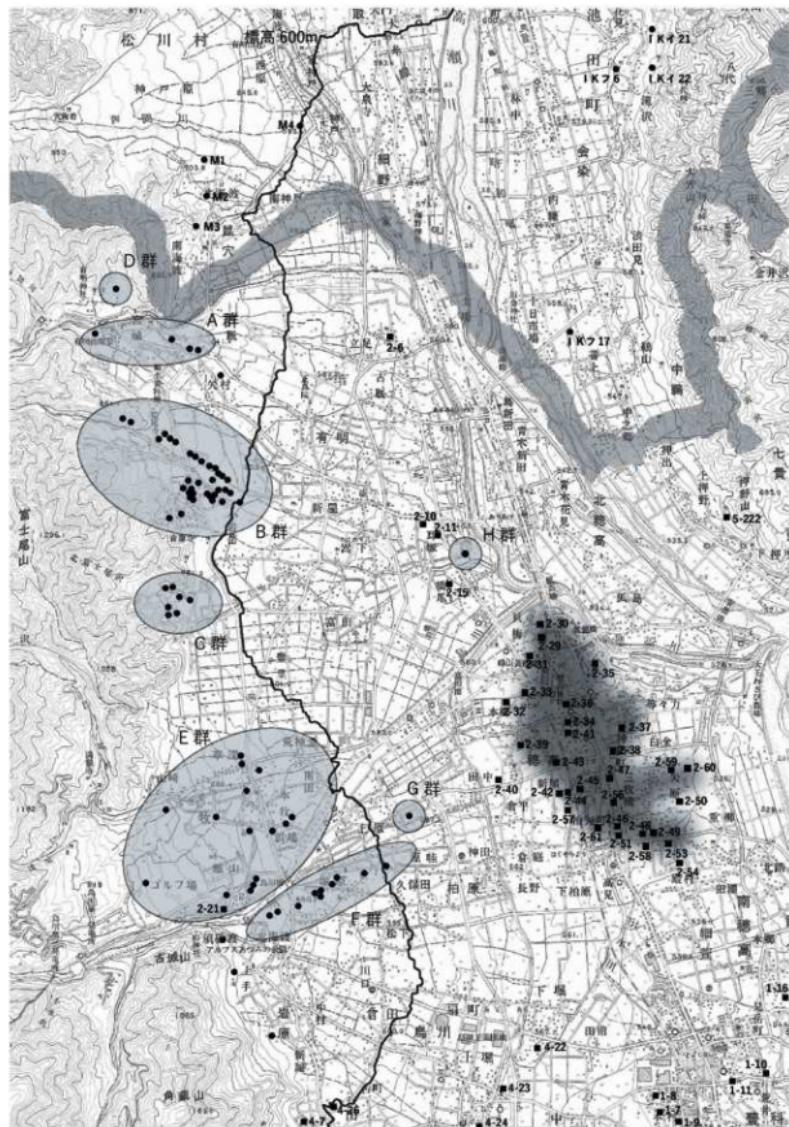
本古墳が所在するC群は、富士尾山を北側から下る北富士尾沢と南側から下る南富士尾沢が標高700mで合流し富士尾沢川となる地点から斜面を下り、沢が「ハ」字に再び分岐する南北の山麓斜面と中央部緩斜面に7基の古墳が分布している。北側山麓の斜面にはC1号墳とC2号墳の2基がある。C1号墳は石材が散乱しているが石室が確認でき、墳丘の痕跡も残る。C1号墳は、C群中最も高い標高690mに立地し、C2号墳はこれに次ぐ高さとなる。南側山麓にはC3号墳、C5号墳、C7号墳がある。C3号墳とC5号墳は天井石が失われたものの側壁と奥壁が残存し、石室が確認できる。C7号墳は2m前後の大型礫が塊となり、無作為に積み重なった状況で、古墳として判然としない点もある。中央緩斜面にはC4号墳とC6号墳が位置している。C4号墳は、住宅地内の石垣上にあり、石室・羨道の大部分が失われているものの、奥壁寄りの石室一部が確認できる。C6号墳は、1m前後の礫集積とも見うけられ、C7号墳と同様の所見となる。

C群内にある7基は、山麓から平坦部に至る急斜面に立地し、約400×300mの範囲に散在して分布している。C群とB群のうち天満沢川右岸の古墳16基の標高分布を比較すると、C群は標高670mを中心にして640~700mの範囲に、B群は615mを中心に610~660mの範囲に墳丘が構築されている。A・B・E・F群が河川に沿って縦長の広範囲に分布しているのに比べ、C群が急傾斜の高位置にまとまっていることが認められる(第9図)。墳丘及び石室構造や規模については、調査事例がないため、過去のデータに依拠せざるを得ないが、現地踏査の所見から現時点でいくつか補正が可能である(第3表)。今回の調査によってもC2号墳の計測値及び主軸が、昭和40年(1965)の分布調査での記録と異なることや、C4号墳の墳丘径が、石室長に比べて極端に大きいことが指摘できた。石室が確認できる5基の古墳は、構築石材の形状と法量、石材の積み上げ方と石室幅が同一であり、破壊が著しいC4号墳を除くと開口部周辺の礫群を考慮した石室長が6~7mになる。また、C5号墳の奥壁にはC2号墳と似た鏡石が置かれている。穂高古墳群全体が、墳丘・石室規模などにおいて、格差の少ない均等性が指摘されているが(桐原1991、三木2006)、C群内の均等性は極めて高いことがわかる。

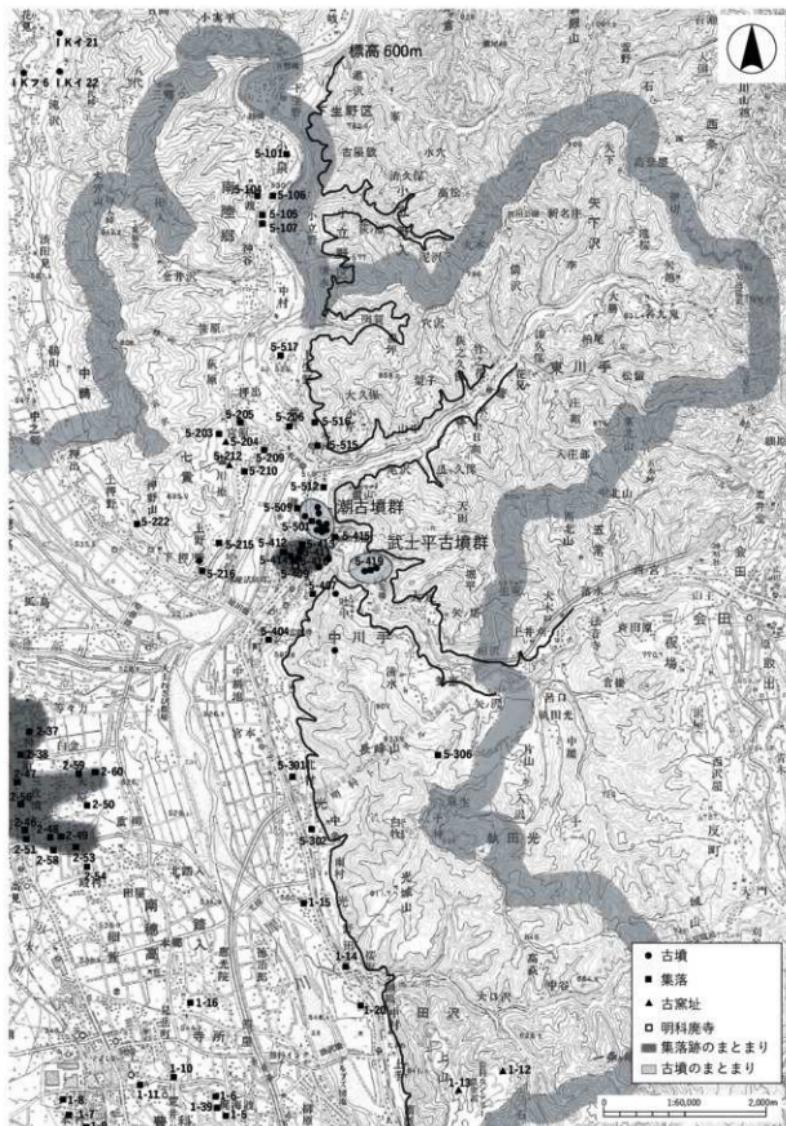
1 「魏石鬼窟」の表記については「魏城窟」の表記もあるが、「穂高町誌」(穂高町誌編纂委1991a)の記載に従った。

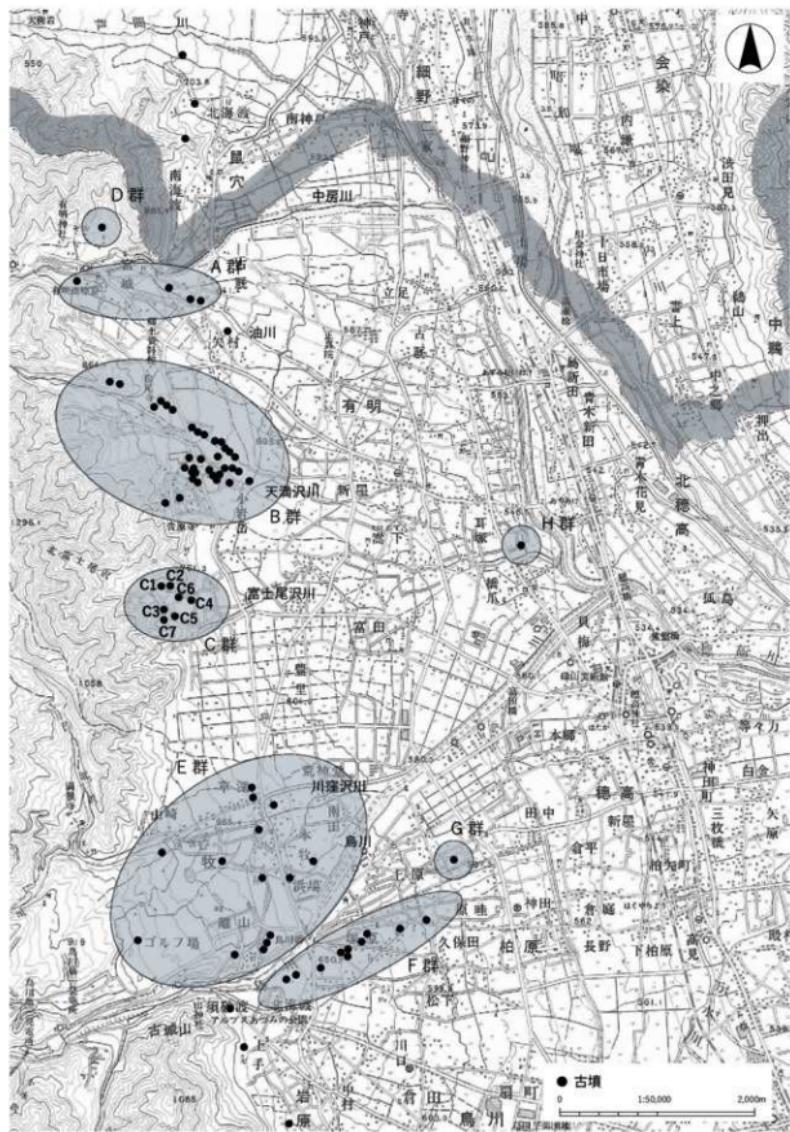
第2表 安曇野市と周辺の古墳・古代集落遺跡

No.	名称	所在地	種類	時代	備考
1-5	荒井遺跡	舟科 東落跡	平安／堅穴1		
1-6	利海波遺跡	舟科 東落跡	平安／堅穴		
1-7	本村遺跡	舟科 敷布地	平安		
1-8	柳原遺跡	舟科 敷布地	平安		
1-9	大内波遺跡	舟科 敷布地	平安		
1-10	越ヶ池遺跡	舟科 敷布地	平安		
1-11	成相遺跡	舟科 敷布地	越文・平安		
1-12	西苗代窓跡群	舟科 生産遺跡	平安		
1-13	上ノ山窓跡群	舟科 生産遺跡	奈良・平安		
1-14	町田窓跡	舟科 東落跡	生産・平安		
1-15	光遺跡	舟科 敷布地	越文・平安		
1-16	原村窓跡	舟科 敷布地	平安		
1-20	小棚原遺跡	舟科 敷布地	生産・平安		
1-22	吉野町遺跡	舟科 東落跡	平安		
1-39	法藏寺遺跡	舟科 社寺跡	平安・中世		
2-6	星敷添遺跡	船高 東落跡	平安		
2-10	耳塚(民組接縫跡)	船高 東落跡	平安		
2-11	耳塚窓跡	船高 東落跡	古墳前期・奈良		
2-15	かんいいくぶ遺跡	船高 東落跡	平安		
2-21	張下遺跡	船高 東落跡	越文・古墳		
2-29	貝塚海上遺跡	船高 東落跡	平安		
2-30	貝塚海下遺跡	船高 東落跡	古墳・平安		
2-31	庄遺跡	船高 東落跡	古墳・平安		
2-32	一本木遺跡	船高 東落跡	平安		
2-33	神の木遺跡	船高 東落跡	平安		
2-35	宮協御遺跡	船高 東落跡	生産中期・平安・中世		
2-36	等々万町印中下印中	船高 東落跡	越文・生産・奈良・平安 (等々万町印中下印中・奈良・平安)		
2-37	北才の神道跡	船高 東落跡	古墳後期・平安		
2-38	塙保遺跡	船高 東落跡	古墳後期・平安・堅穴30・掘立柱(古墳後期)		
2-39	雲仙の神道跡	船高 東落跡	平安		
2-40	荒井南遺跡	船高 東落跡	平安		
2-41	船高北校北遺跡	船高 東落跡	平安		
2-42	大坪沢遺跡	船高 東落跡	平安		
2-43	雨原遺跡	船高 東落跡	生産・古墳・平安・堅穴5(古墳・平安)		
2-44	長者塚遺跡	船高 東落跡	古墳・平安		
2-45	延闊遺跡	船高 東落跡	平安		
2-46	矢原規規池遺跡	船高 東落跡	平安		
2-47	三枚橋遺跡	船高 東落跡	生産中期・中世・堅穴47・掘立13(奈良・平安)		
2-48	矢原大輪塚遺跡	船高 東落跡	古墳・平安		
2-49	矢原百穴遺跡	船高 東落跡	生産中期・奈良・平安・堅穴11・掘立3(古墳後期)		
2-50	梅池遺跡	船高 東落跡	古墳中期・平安		
2-51	四反田遺跡	船高 東落跡	古墳後期・平安		
2-53	馬場街道遺跡	船高 東落跡	古墳・奈良・平安・堅穴13・掘立1(古墳・後期・奈良・平安)		
2-54	矢原ふて跡遺跡	船高 東落跡	平安		
2-56	ハツ町遺跡	船高 東落跡	奈良・平安・堅穴5(古墳後期)・堅穴21(奈良・平安)		
2-57	前原遺跡	船高 東落跡	古墳後期・平安		
2-58	中在地遺跡	船高 東落跡	古墳中期・平安		
2-59	脛之内遺跡	船高 東落跡	古墳中期・後期・中世		
2-60	矢原上地遺跡	船高 東落跡	古墳中期・後期		
2-61	佛之路御道跡	船高 東落跡	平安		
3-14	三角系遺跡	三郎	平安堅穴56		
4-7	おもうぞ遺跡	船全 敷布地	越文・生産・古代		
4-12	曲馬遺跡	船全 敷布地	越文・古代		
4-19	そり衣遺跡	船全 東落跡	越文・生産・古代・中世		
4-20	なかよし遺跡	船全 東落跡	越文・古代		
4-22	下追造山遺跡	船全 敷布地	古代		
4-23	タコ茶(盛昌前)遺跡	船全 敷布地	越文・古代		
4-24	城今小学校付近遺跡	船全 東落跡	古代		
4-26	田中井北村遺跡	船全 敷布地	越文・古代・中世		
4-27	瓶の内遺跡	船全 敷布地	越文・古代・中世		
5-101	はうくろ星屋敷遺跡	明舟 敷布地	越文・生産・古墳・平安・平安堅穴20・掘立1		
5-104	竹原遺跡	明舟 敷布地	越文・古代		
5-105	上ノ段遺跡	明舟 敷布地	古代		
5-106	北原遺跡	明舟 敷布地	越文・古代		
5-107	櫛千瀬跡	明舟 敷布地	古代		
5-203	宮原遺跡	明舟 敷布地	越文・古代		
5-204	宮原古窓跡	明舟 生産遺跡	古墳		
5-205	宮ノ前遺跡	明舟 東落跡	越文・古代		
5-206	荒井遺跡	明舟 敷布地	越文・古代		
5-209	みどりヶ丘丘跡	明舟 敷布地	越文・生産・古代		
5-210	藤原遺跡	明舟 敷布地	越文・生産・古代・中世・近世		
5-212	桜坂古窓跡	明舟 生産遺跡	古代・中世・近世		
5-215	上野遺跡	明舟 敷布地	越文・古代・中世・近世		
5-216	わしき遺跡	明舟 敷布地	越文・古代・中世・近世		
5-222	御野千鶴宮	明舟 敷布地	古代・中世・近世		
5-301	光道群古北村遺跡	明舟 東落跡	越文・近世・平安・古墳・掘立43(古墳後期)		
5-302	光道群古条遺跡	明舟 東落跡	古代		
5-306	天平塗跡	明舟 敷布地	越文・古代		
5-404	上手屋敷遺跡	明舟 東落跡	越文・古墳・奈良・平安・中世・近世		
5-407	羽野御道群	明舟 敷布地	越文・古代		
5-409	羽野御道群	明舟 社寺地	奈良・平安		
5-410	明月遺跡群	明舟 東落跡	古墳後期・奈良・平安		
5-411	明月遺跡群	明舟 東落跡	古墳後期・奈良・平安		
5-412	明月遺跡群	明舟 東落跡	その他の(聖地)		
5-413	明月遺跡群	明舟 東落跡	古墳・古墳群・古墳群		
5-414	明月遺跡群	明舟 東落跡	古墳・古墳群・古墳		
5-415	こや城	明舟 東落跡	越文・古墳・風景		
5-419	武士平遺跡	明舟 敷布地	古墳・中世・近世		
5-501	酒田御道群	明舟 東落跡	古墳・古墳・古墳・古墳・古墳・古墳・古墳		
5-509	古墳群	明舟 東落跡	古墳・古墳・古墳		
5-512	酒田御道群	明舟 東落跡	古墳・古墳・古墳		
5-513	牛引塚遺跡	明舟 東落跡	古墳・古墳		
5-514	牛引塚遺跡	明舟 東落跡	古墳・古墳		
M1	御父塚古墳	松川村 古墳	古墳・古墳・古墳		
M2	桜井おかめ塚	松川村 古墳	不明(洋城)		
M3	牛引穴墳	松川村 古墳	古墳		
M4	鳥糞塚跡	松川村 敷布地	聖地(聖地)		
IK-7	難保古墳	施田町 古墳	古墳(勾玉、刀劍の伝出土、石室残存)		
IK-13	塚内遺跡	施田町 古墳	古墳(鉄器、頭忠器)		
IK-14	堀側遺跡	施田町 古墳	溝城、铁刀、玉。石室長814mm、鐵塊、施田町丸		
IK-15	大林町遺跡	施田町 古墳	溝城、铁刀(2)		
IK-74	庵の古墳	施田町 古墳	古墳(史跡保存、金閣)		
IK-76	宮ノ下の塚	施田町 古墳	古墳(石室保存)		
IK-77	万寿塚遺跡	施田町 古墳	古墳(近世以入骨・刀出土の伝承)		

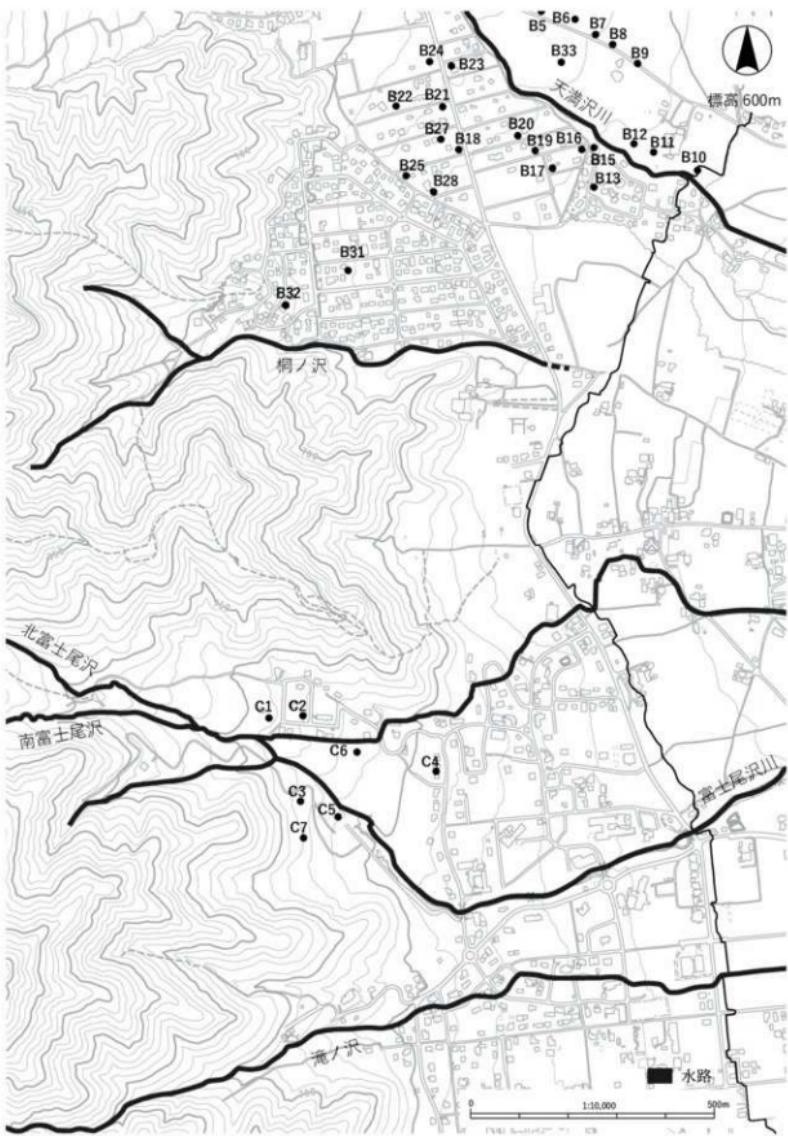


第6図 安曇野市と周辺の古墳：古代集落遺跡

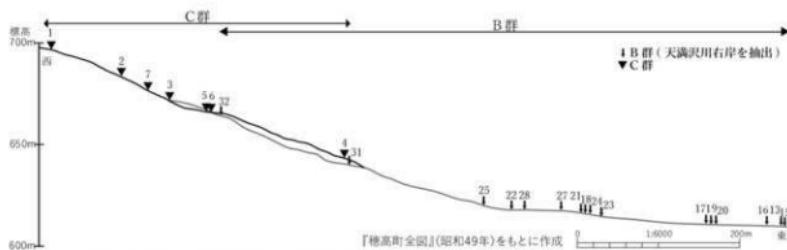




第7図 穂高古墳群



第8図 富士尾沢とC群の分布



第9図 C群とB群（天満沢川右岸）の垂直分布

第3表 穂高古墳群C群（穂高町誌編纂委1991aを基に作成）

No.	墳丘径 (m)	墳丘高 (m)	石室長 (m)	石室幅 (m)	石室高 (m)	主軸	出土遺物	現況	標高
C1	長：18.5 短：11.7	2.0	7.2	1.45	1.1	N10°W	—	側壁・墳丘 残存	690m
C2 分布調査	11.0	1.3	6	1.25	1.3	N35°W	—	—	680m
C2 発掘調査	14.0	1.8	7.6	1.7 奥壁：1.5	1.8	N3°E	直刀、平根系鉄鎌、 長頭鎌、須恵器	調査後湮滅	680m
C3	10.5	1.5	7	奥：1.7 入口：1.3	未計測	未計測	—	蓋石6個ほ ど散乱	660m
C4	長：(14.2) 短：(9.1)	1.43	(3.3)	1.5	未計測	未計測	—	側壁・奥壁 残存	640m
C5	未計測	未計測	5.3	未計測	1.6	未計測	—	側壁残存	650m
C6	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	—	角礫の積石 の可能性が ある	680m
C7	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	—	角礫の積石 の可能性が ある	670m

※（ ）内は、残存している法量を計測した値

## 第3章 調査の方法

今回の発掘調査は、別荘分譲地開発により安曇野市穂高有明の山林内に所在するC2号墳が対象となった。本古墳は昭和40年（1965）の分布調査によって、石室が残る古墳として存在が明確となり標柱によって位置が特定されていた。造成計画によると、地表から150cmほどの深さまで斜面を掘削し大規模に整地が実施されることから、墳丘範囲と埋葬施設の記録保存に向けた発掘調査を実施することになった。

墳丘の範囲は、露呈している石室石材と散乱した構築石材の分布状況、東に張り出した微地形から直徑8m前後と推定した。石室内及び墳丘には立木が繁茂していたため、伐採と精査を行い、石室状態の良い側壁に直交する東西方向のトレンチを2か所、奥壁に直交する南北方向に1か所と、さらに北側墳丘裾部に1か所設定した（第12図）。また、東西南北の方位に沿って、2m間隔のグリッドを設定して調査を進めることとした。トレンチ及び遺構の掘り下げは、全て手掘りで行い、廃土処理に重機を使った。

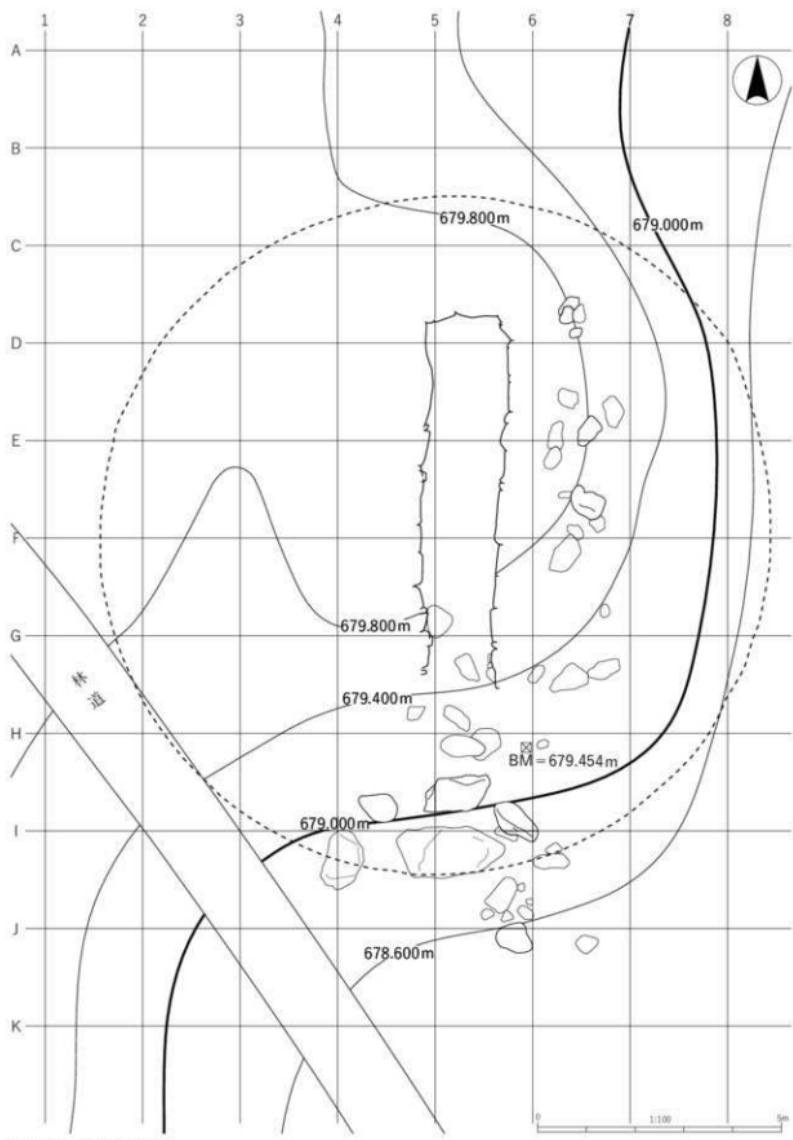
墳丘調査では、封土構築方法及び側壁石積の構造等を確認するためA～Cのトレンチ3か所を拡張し、地山まで手掘りによる掘り下げを行い、各土層の断面観察から盛土の状況を確認した。トレンチ調査と並行して周辺の腐植土を掘り下げ、散在した石材と石室上部までの検出状況の写真と図面記録を行った。石室内部の調査では、崩落した構築材の除去と僅かに残る覆土を精査し、残存する構築石材と遺物出土状況の記録をした。石室及び前庭部床面に堆積した10～20cmの覆土については、フレイにかけ遺物検出を試みたが骨、玉類等の出土はなかった。

測量作業は、真北を基準に2mグリッドを設定しこれを基としたが、基準点測量は実施していない<sup>1</sup>。整理作業は、平成7年（1995）度と令和3年（2021）度に分けて、土器の洗浄、注記、接合、実測、図版作成、写真撮影及び報告書作成を行った。

1 第10図の観測点座標値は、別荘分譲地開発終了後の新たな分譲区画・道路造成地形地上から復元して数値をあてはめたものである。



第10図 グリッド配置図（地形図は現在のもの）



第11図 調査区全体図

## 第4章 層序

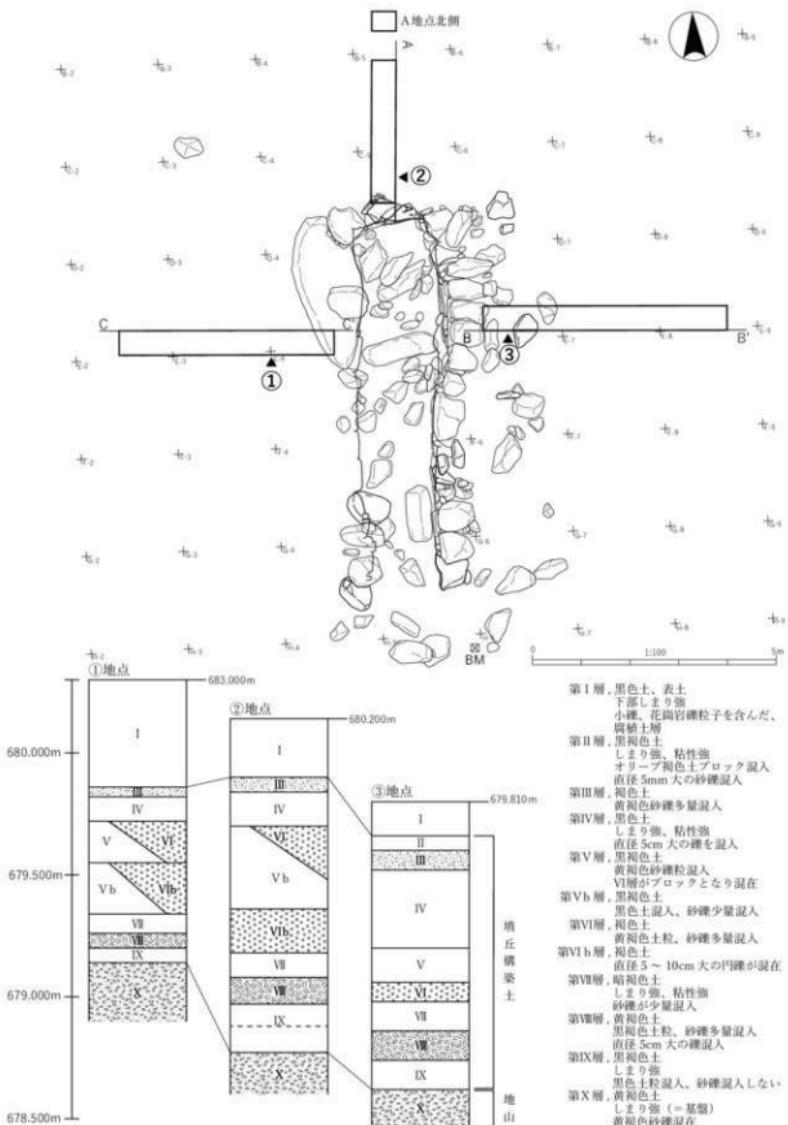
調査地点付近の斜面は、富士尾山から急勾配で東へ流下する富士尾沢川の左岸に位置し、この地形にはいわゆる有明砂と呼ばれる花崗岩破碎礫が主体となっていた。本古墳裾部の堆積土層は、表土である植物質の腐食による黒色土が20cm程度の厚みで、その下部には粘性が強くしまりのある黒褐色土が堆積していた。墳丘土層は、黒色土以下に黒褐色粘土と花崗岩風化礫を主体とする黄褐色砂礫を多量に含んだしまりの強い土が互層となって検出された。墳丘が構築された基盤（地山）は、砂礫を混入した黄褐色土で、西側は基盤を削平して平坦面を作りだした状況であった。本古墳は、沢による押出によって土砂が厚く堆積し、勾配が緩くなった場所に占地し、基盤を整地して石室を構築したと推測できた。

### 1 層序と土質

墳丘外となる周辺の堆積土は、3層に分層され自然堆積土として捉えた。表土（I層）は、厚み20~30cmの黒色土（黒ボク土）、粗砂を含み、粘性・しまりの弱い土質で、下部ほど粗砂の粒子が大きい傾向であった。表土の下は、厚み10~15cmの黄褐色砂礫の混入する褐色土が間層としてあり、さらに花崗岩風化礫に由来する粗粒砂礫層が深度60cm以上堆積している状況であった。周辺に散在する花崗岩の巨礫は、基盤層から間層内にかけて確認された。

墳丘外の土層を基に、墳丘に設定した東西方向のトレンチ（西①・東③）と南北方向の奥壁側トレンチと裾部のトレンチ（北②）の土層を基本層序とした（第12図）。

I層上層が表土となる黒色腐植土、I層下部・II~IX層が墳丘構築土層となり、X層が基盤の土層である。土質は、腐植土となる表土も含めて、各層ともに粘性のある黒色~褐色粘土が基調となり花崗岩を主体とする砂礫が含まれている。巨木・雑木の根により堆積土層の分層が判然としなかったか所もあったが、墳丘は砂礫が多量に含まれる褐色土（III層・VI層・VII層）と、粘性・しまりが強い黒褐色土（IV層・V層・VIII層・IX層）で構築されていた。特にVI層の砂礫混入褐色土が平面で斑紋状のブロックとなりV層黒褐色土の上面・下面層の間に互層となる状況も見られた。IX層は黒色土の斑紋がみられ、花崗岩砂礫の混在しないしまりの強い黒褐色土であり、各トレンチで安定して検出された。



第12図 基本層序

## 第5章 遺構

### C2号墳

墳形	直径約14mの円墳。周溝はない。		
主体部	無袖横穴式石室	残存長7.6m	主軸 N 3°E
玄室	長：6.0m	幅：(奥) 1.74m、(最大) 1.52m	
	残存高：奥壁1.8m、西側壁1.72m		
羨道	長：1.6m以上		
羨門	幅：1.16m		

玄室と羨道の区分は石積みの違い、方向と閉塞石の位置から判断した。羨道長は開口部側壁破壊が著しく全長は不明である。

### I 石室・墳丘検出状況

本古墳では、奥壁及び奥壁寄りの東西側壁の上部と開口部付近の側壁が露呈し、山麓斜面が東方向へ平坦に突出する微地形（墳丘）が確認されていた。調査前の踏査では、墳丘には樹木が繁茂しており、石室内と開口部付近には、直径約50cmのアカマツが生い茂っていた。石室は、アカマツの立木を含め奥壁から4mが大きく崖み、内部の石積みが確認されるなど、天井石が取り除かれ、放置された状況が明らかであった。また、石室の開口部となる南側には、長軸2.2mの花崗岩巨礫が露呈し、周辺に0.5～1.0m大の礫の広がりが認められた。この巨礫が、埋葬施設の天井石もしくは羨道封鎖に用いられた石と推測された。

墳形は、斜面の崩落、植林・山林整備により形状を明確に把握することはできなかったが、南東側の斜面に張り出す小丘が確認できた。立木伐採と下草刈り後の表土精査では、石室中央から南方向6.5～7m、東に5.5～6m辺りに墳丘の立ち上がりを見出すことができた。墳丘測量から南北約14m、東西約13m程度の円墳が想定された。墳丘南端の巨礫は、緩い斜面にずれ落ちる状況で基盤土層上にあった。

#### （1）墳丘盛土の調査（第14図）

墳丘の封土構造を調査するため、石室主軸上の南北方向にトレント A と、主軸に直交する東西方向にトレント B・C を設定し土層観察を行った。B・C トレントは、側壁の高い奥壁寄りに設定し、基盤層まで掘削できたが、A トレントは、十分な掘削ができず上層（9層）までとなった。また、墳丘全面の平面調査ができなかったため、構築土の広がりについては未確認で、トレント調査の所見のみとなる。

墳丘北側は、北東に緩く傾斜する地形で、奥壁上部の積み石から北に4mほどで平坦面となり、クマザサが繁茂するアカマツ林であった。奥壁頂部（A'）から3.5m北の墳丘裾部にあたる地点にポイント（A）を設定し南北方向に50cm幅でトレントを掘削した。表土となる黒色土（1層）は A 地点では10～15cmの厚みであったが、石室付近では30～35cmの厚みとなり、下部は細砂が混入したしまりの

強い黒色土であった。1層下には、黄褐色の粗砂が混じる黒色土（4層）が検出されていたが、間層に花崗岩風化礫を主体とする褐色土（3層）がブロック状に広がっている状況が数か所にみられた。4層下からも3層と類似した黄褐色砂礫を含むシルト層（6層）が10cmの厚みをもった塊として、50～90cmほどの広がりをもって検出された。この3・6層の黄橙色礫・粗砂混入シルト層については、墳丘全体を覆うような面的な盛土ではなく、部分的に転圧して固くしまられた土として捉えた。4層下の6層を含まない盛土は、砂礫が少量混じる黒褐色土（5層）、さら下層には、砂礫粗砂を含むシルト層（6層もしくは6b層）を挟んで、暗褐色土（7層）が8cm前後の厚みをもって面的に検出された。7層上面の粗砂混入褐色シルト層（6b層）は、花崗岩礫の混在が顕著で、6層に比べ粒子が大きめであった。7層下は、粗砂を主体とした黄褐色シルト層（8層）が厚み約10cmで盛土され、8層下には砂礫と粗砂が混入しない黒褐色土（9層）が石室奥壁まで確認できた。奥壁付近の掘削が困難となったため、墳丘裾のA地点北側を50cm掘り下げたところ、黒色土層が35～40cm検出され、基盤層に達することを確認した。ここで検出された黒色土の層序は、A地点の掘削記録が不十分であったため不明であるが、5層より上層の黒色土と思われる。

墳丘東側は側壁頂部（B）から裾部の5m地点にポイント（B'）を設定し、西山麓側は腰石となる側壁の頂部（C'）から裾部の5m地点にポイント（C）を設定した。西裾部のC地点は、林道敷設と山林作業により削平されていたため、4.2m地点までの土層確認となった。表土である黒色土（1層）は、Aトレント同様に石室付近で40cm程度の厚みをもって検出され、側壁付近では、固くしまった土質であった。Bトレントでは、強くしまった黒褐色土（2層）がブロック状になって側壁を固めていた。花崗岩風化礫を主体とする褐色シルト層（3層）は、側壁から2m以内にブロックとなって検出され、中間から裾部には見られなかった。3層下の黒色土（4層）は、側壁から裾部まで断続的に盛土されていて、側壁付近の黒色土は転圧を受けたようにしまりがあった。4～7層の黒・黒褐・暗褐色土の間層となる粗砂混入褐色シルト層（6層）は、Cトレントにおいて30cmの厚みで面として広く検出される箇所があり、5層の黒褐色土と混在してブロック状に重なる盛土となっていた。黄褐色砂礫と粗砂を混入したシルト層（8層）は、面として側壁から3m前後に10cm程の厚みをもった均一な堆積層として検出された。また、Bトレントでは、砂礫とともに一辺0.6m大の角礫3点と0.2m以下の小礫複数が、Cトレントでは長軸0.6m大の楕円礫が含まれていた。これらの礫が墳丘裾部を列状に閉む様子はないとみられたが、意図的に墳丘構築用材に用いられた可能性は高い。最下層は、礫の混入しない黒褐色土（9層）であり、Cトレントでは側壁から3.5m地点から腰石下部に入り込むように検出され、Bトレントでも基底石の最下部まで黒褐色土（9層）と直上の8層が確認された。Bトレントでは裾部まで最下層の黒褐色土（9層）が検出されたが、東側壁面から約2m地点で、8・9層と基盤層が15cmの段差（ずれ）となって観察され、地震による影響の可能性が高いと判断した。また、裾部から東の黒褐色土については、1～5層のいずれか曖昧となった。

花崗岩風化礫を主体とする黄褐色砂礫層（10層）は、B・Cトレントと石室内の基盤層の検出によって、傾斜面上に東西8～10mほどの平坦地をつくりだしていることが検証できた。Cトレントでは、石室中心から西に5m地点（第14図①）に墳丘構築の起点となる緩い傾斜の掘り込みが、中心から西に22

m地点（第14図②）には60~70cmの掘り込みを確認した。Bトレンチでは、中心から東に5mほどの地点（第14図③）に平坦面の終点となる斜面変換点を検出した。①と③を墳丘整地、②を石室の掘り込みと整地面として捉えた。

今回の調査では、黒色土を基調とする1・2・5・5b・7・9層の土質分類が不十分であったこと、黒色土と砂礫土の面的な調査ができなかったこと、墳丘裾部周辺を掘り下げて盛土施設の確認ができなかったことなど墳丘全体の盛土構造を詳細に分析・検討する資料に欠ける点があった。けれども、本古墳群の墳丘と石室構築を解明する手がかりをいくつか提示することができた。以下の通りである。

本古墳は、西側斜面を掘り込んで墳丘と石室面をつくりだした。石室には、黒褐色土を床面とし基底石が配置され、黒褐色土を最下部の石室構築土として用いた。側壁の構築には、黒色土と砂礫・粗砂を多量に混入した褐色土を使い、互層となるように順次積み上げられていた。石室は、黒色土と砂礫による版築（転圧）によって構築され、墳丘盛土は、ブロック状に黒色土と砂礫土を交互に用いることで強度を増すように敷設されていた。

## （2）石室の調査（第15・16図）

石室は、奥壁付近の東西側壁が良好な残存状況であり、東側壁の積み石が5段と、西側壁をつくる長軸3.2m、高さ1.5mの巨礫を検出した。ただし、石室中央部である奥壁から約4m付近及び漢道部付近は積み石が減り、中央部は2段の石積み、開口部は石材が散乱していた。天井石はなく、破碎後に石室内に崩落した数石のほかは、抜き取りによって持ち去られたとみられた。

壊された構築石材は、石室内部と前庭部、東斜面から検出され、特に前庭部への散乱状況は顕著であった。前庭部からは複数の須恵器片と金属器の出土をみたが、この散乱した礫の下から検出された遺物はなかった。また前庭部の大形石材が、石室主軸を中心検出されたことから、墳丘が封土に覆われていた段階で開口部に手が加えられ、人為的な破壊があった状況と判断した。

石室内埋土は、砂礫混じりの黒色土が30~40cm程の厚みで堆積し、上層には10~20cm大の角礫が点在していた。奥壁は、露呈していた最上段の不安定な積み石まで4段、東側壁は5段まで確認でき、積み石上部から床面までの高さは1.8mであった。奥壁最下段は、1.2×0.7mの長方形礫（左）と一辺0.9mの方形礫（右）の2石が、広口面を壁面として縦置きに並んで配置されていた（=鏡石）。左奥壁礫は、西側壁をつくる巨礫と隙間なく合致するよう接点が揃えられ、右奥壁礫は、西壁巨礫の南北軸に垂直になる壁面を作り出していた。この2石の奥壁礫に続く東（右）側壁にも1石の縦置き基底石があり、斜めに東壁に接する位置に据えられていた。左奥壁石上には、長軸0.4mの礫2石が小口積み、右奥壁石上には詰石を挟んで1.0mの大形角礫が平積みされていた。

東側壁の上段部には、短軸0.45~0.6m、長軸0.5~0.8m大の均一な礫が、詰石とともに小口積みで整然と並んでいた。ただ、3段目付近から上部に積み上げられた石材ほど、外側にずれて検出され、基底石となる最下段よりも外傾斜して積まれている状況がみられた。最下段の基底石は漢道部まで、長軸0.8m前後の角礫が黒褐色土から検出された。奥壁から約3m付近の玄室中央部の東壁では、2段目の積み石までが構造石材と粗砂混じりの黒褐色土に埋もれ、3段目までの持ち送り積みが観察された。

西側壁は、長軸3.2mの巨礫（＝腰石）が、垂直に立つ壁面と平坦な上面を露呈していた。この腰石の内壁は下部まで苔等が繁茂した痕跡があり、長年にわたり外気にさらされたことが確認できた。腰石から奥壁、東側壁にかけて「コ」字形に石積みが良好に残されていることから、奥壁寄りの天井石が、近年まで存続し、形状を保持していたことが推測できた。西側壁は、玄室中央部で上部構築材が失われ、基底石と2段目の石積みが黒色土中から検出され、露呈していた羨道付近の積み石に続くことが確認された。西側壁の基底石も東壁と同様で長軸0.8m前後の角礫が平積みされていた。ただこの基底石は、東側壁と異なり腰石から5個目で途切れ、扁平な小形円礫に変わり、扁平礫上には0.6~0.8m大の礫が小口積みで2段積まれていた。変換点となる側壁に接するように、石室内床面上には一辺0.7mの隅丸三角形の礫があり、この礫上面から直刀が検出された（写真図版2）。西側壁は、この地点を境として、石室幅を狭めるよう内側方向に構築されていた。調査時は、直刀が乗った梢円礫が玄室を閉塞させた石材として認識していた。

開口部付近の石室構築材は、最下段と2段目程度を残して、前庭部と石室外に散乱していた。また、散乱した構築石材の間からは、須恵器の小破片と金属器が検出された。前庭部には、側壁用材となる長軸80cm前後の角礫と天井石を思わせる扁平な大形礫が主軸上から検出された。後者の巨礫は、長軸2.2mで墳丘南端の斜面上にあり、ほかの礫より40cm程低いレベルに位置していた。羨道の長さは、開口部の破壊により正確につかめなかったが、東側壁がなくなる南方向50cm付近から遺物と礫検出の広がりが認められることから、最大でも2m程度になると捉えた。

石室床面には、立木の根によって黄褐色砂礫が混入した褐色シルトになる部分もあったが、しまりの強い黒色土がみられ、礫はなかった。石室縁辺の腰石を含めた基底石沿いからは、粗粒砂を含むしまりの強い黒褐色粘土が15cm程度の厚みをもって均一に検出された。このことから、黒褐色粘土が、本来の床面になると判断した。また、このしまりの強い粘土は腰石を含めた基底石の下部及び墳丘面でも検出され、石室構築にかかわる土であった。

### （3）石室構造（第17図）

墳丘は後世の災害と開発により原形をとどめず、石室は側壁上部及び天井石と羨道の一部が失われ、立木等によって床面、石積みに変形が認められた。検出された遺構から、石積み構造と墳丘構築について整理してみたい。

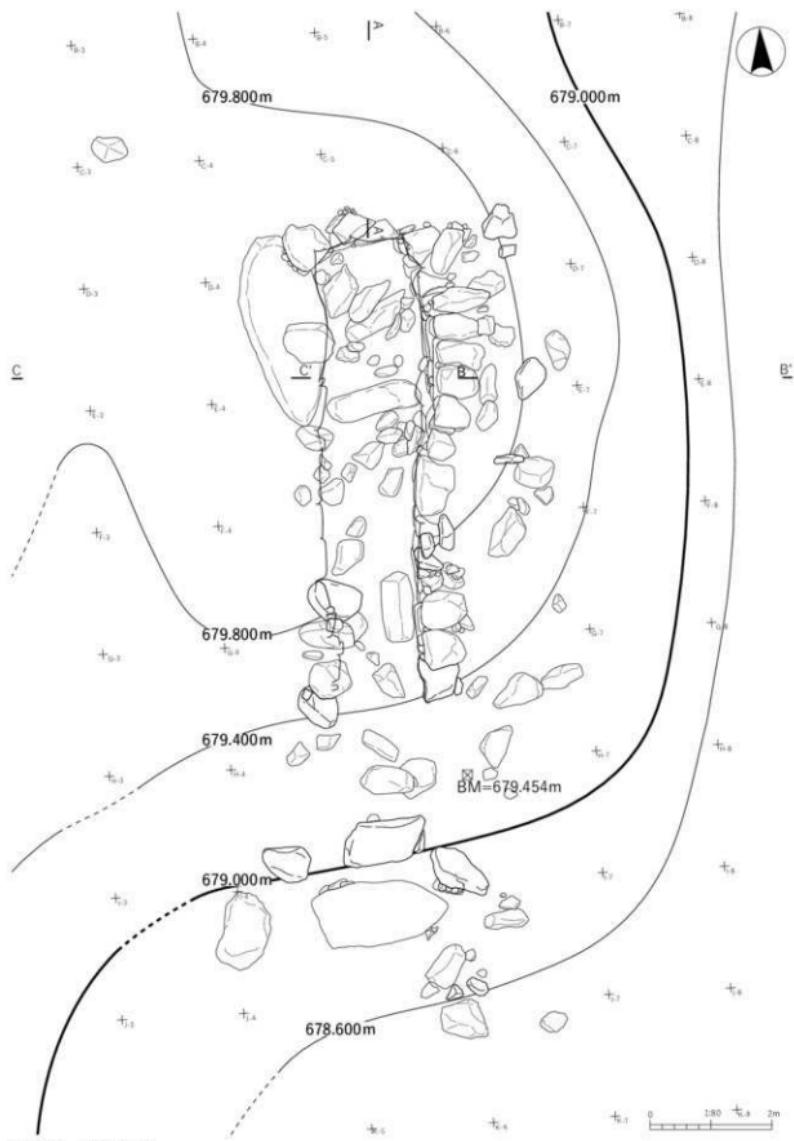
C群が立地する山麓には、富士尾沢川がもたらした花崗岩巨石がいたるところに点在し、草木の少ない山麓には、大小の花崗岩風化・破碎礫が露出している。石室及び墳丘から検出された石材は、2.0mを超す大形の石材から詰石などに用いられた小形の礫までのすべてが花崗岩であった。用材の形状は、角が丸く滑らかな自然礫と角柱や平面を作り出すために打ち欠いた削材が利用されていた。構築材となる素材の確保は、山麓一帯に露頭している角礫も考慮されるが、C群の古墳全てが、沢から50m以内の位置にあり、石材の供給には沢筋にある豊富な崩落礫の利用が優先され、これが選地に影響していたと考えられる。

石室は、西側壁の奥にある巨石が腰石となり、この側壁を基底として構築されている。腰石は、長軸

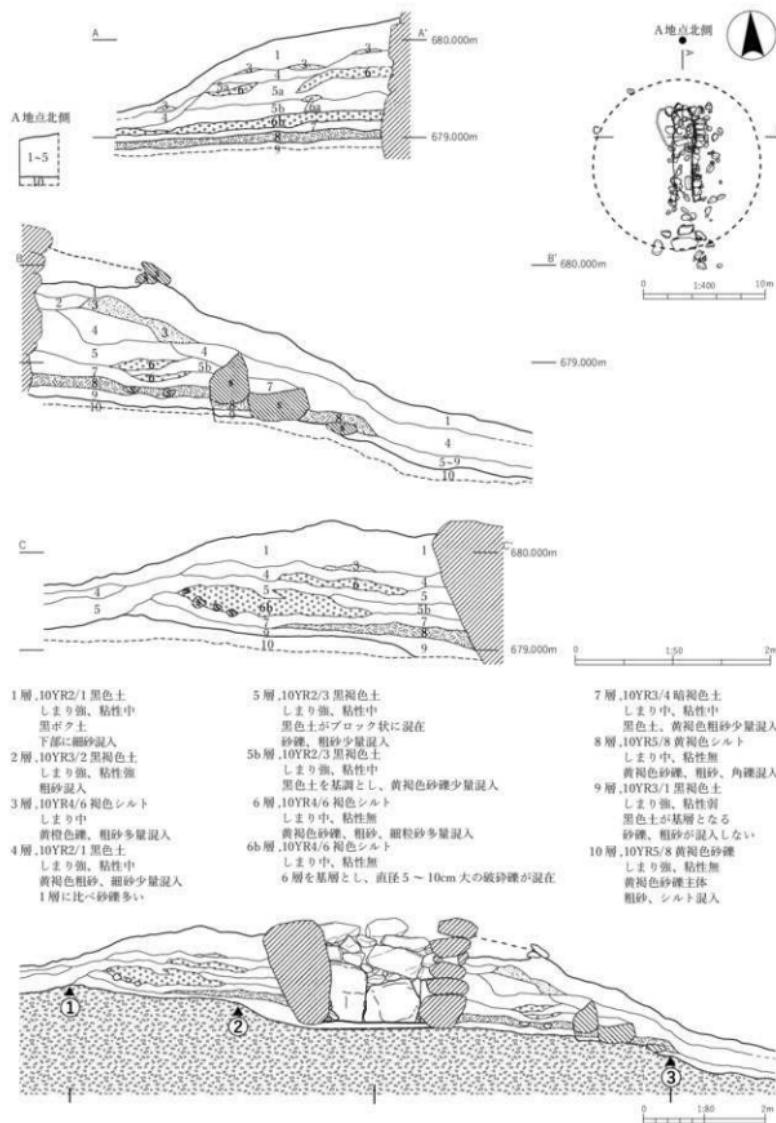
3.2m、幅1.3m、高さ1.6mの平面舟形状の花崗岩である（写真図版1・2）。腰石の壁面は床面から垂直に、上面は水平になるように設置されている（第16図D-D'）。断面形状は、上面に比べて床面側は接地面が小さい逆台形となり、やや不安定な置石にも見える。平らな腰石壁面が、主軸と平行し、奥壁右の石面が主軸に対して直交するかたちとなっている。石室は腰石と右奥壁によって玄室プランが決められ、縱置きの奥壁2石から東側壁奥の縱置2石を配置し、さらに東側壁の基底石に続く。基底石は全てが角礫で、長軸を壁面とする平置きで配置され、東側壁には10石、西側壁には5石が残存している。東側壁は隅にある縱置きの側壁から入り口方向へ5石目（第17図②）まで傾斜して最下段が構築されている。②地点は玄室中央部に位置し、相対する西壁の腰石の縁と側壁最下段の1石目と一致する。東側壁①地点の2段目は、大形の角礫が平置きされ、3段目まで布積み、上段まで垂直な石積みがみられたことから、①地点を起点として奥壁から②地点までの側壁構築を重視していた構造となっている。このことは、腰石を敷設した時点で、玄室の規模と強度・バランスが考慮されていたことを示す。西側壁は腰石が舳先のような形状であることから、長軸1m近い平石を基底石に用いて2段目まで平積みしている。3段目以上の石積みは不明であるが、壁面に礫平坦面が整うように割った礫が目についた。基底石5石は開口部側の3石が長軸50～60cmとやや小ぶりとなり、最下段の礫は厚み20cmの扁平礫と詰石に用いられる中形礫になる。奥壁から6m地点にあたり、腰石と東側壁の起点となる2倍の規模で玄室が終わる。西側壁は、この積み石地点から内傾する方向（南東方向）に延長して構築される。羨道の石積みは、最下段に小礫を、その上に大形礫を配している。東側壁は、基底石9石目の平石上に、角礫が小口積みで2段検出され、西側壁の石積みと石室規模からここが玄室入り口となる。東側壁は内傾せず南方に向って真っすぐに延長されている。

石室は、左側壁奥の腰石を置き、奥壁2石を配した。その後右側壁の基底石10数個を南方向直線上に配置した。さらに、左側壁の基底石を5石南方向に配置して、幅約1.6m、長さ約6mの長方形のプランを作り出した。玄室中間点となる3m付近まで奥壁から右側壁を高く、強固に構築し、少しづつ羨道側に積み石を伸ばしていった。石室構築は埴丘盛土とともにに行われ、羨道部を残して石積みが終わり、左羨道側壁が後付けで構築された。

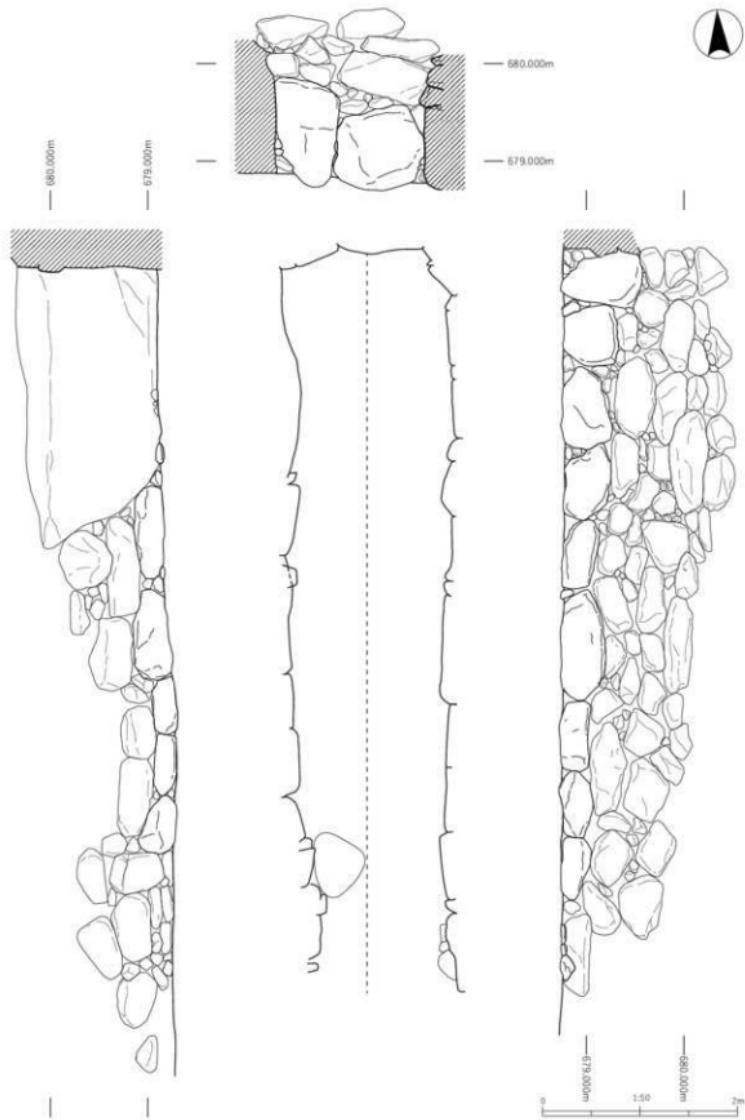
穂高古墳群は、玄室内の間仕切りと玄室と羨道を分ける立石がないことが特徴である。本古墳も同様に、玄室と羨道と明確に区別する明確な玄門ではなく、基底石と石積みの違いと石室幅を狭める側壁の方向によって判別した。また、側壁の石積み方法の違いから玄室が2区分できる可能性も考えた。



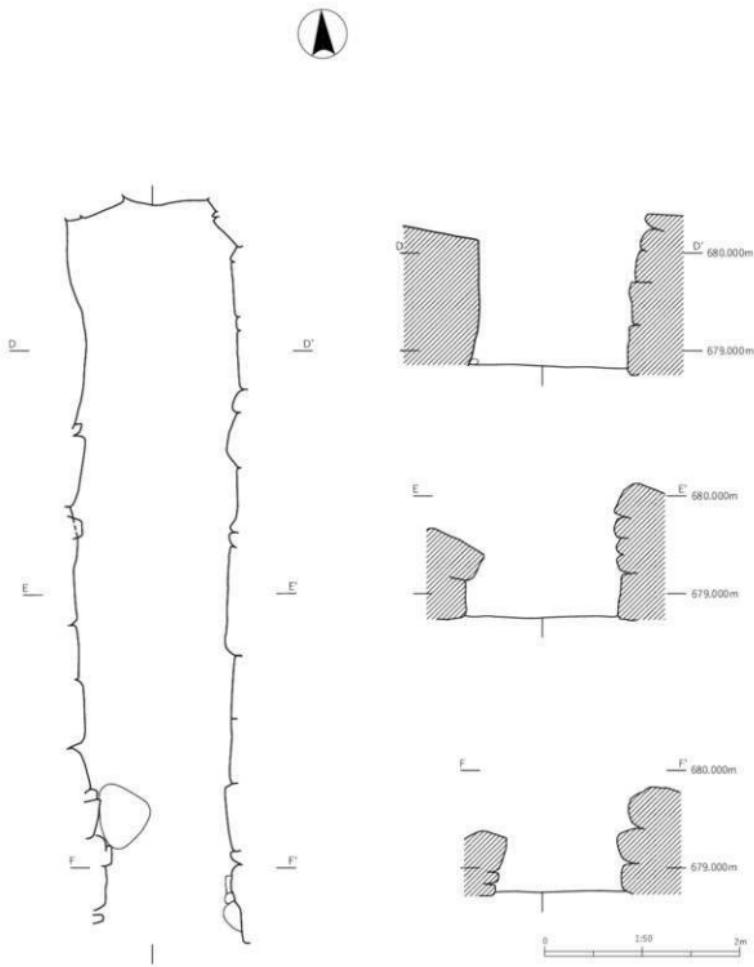
第13図 石室検出図



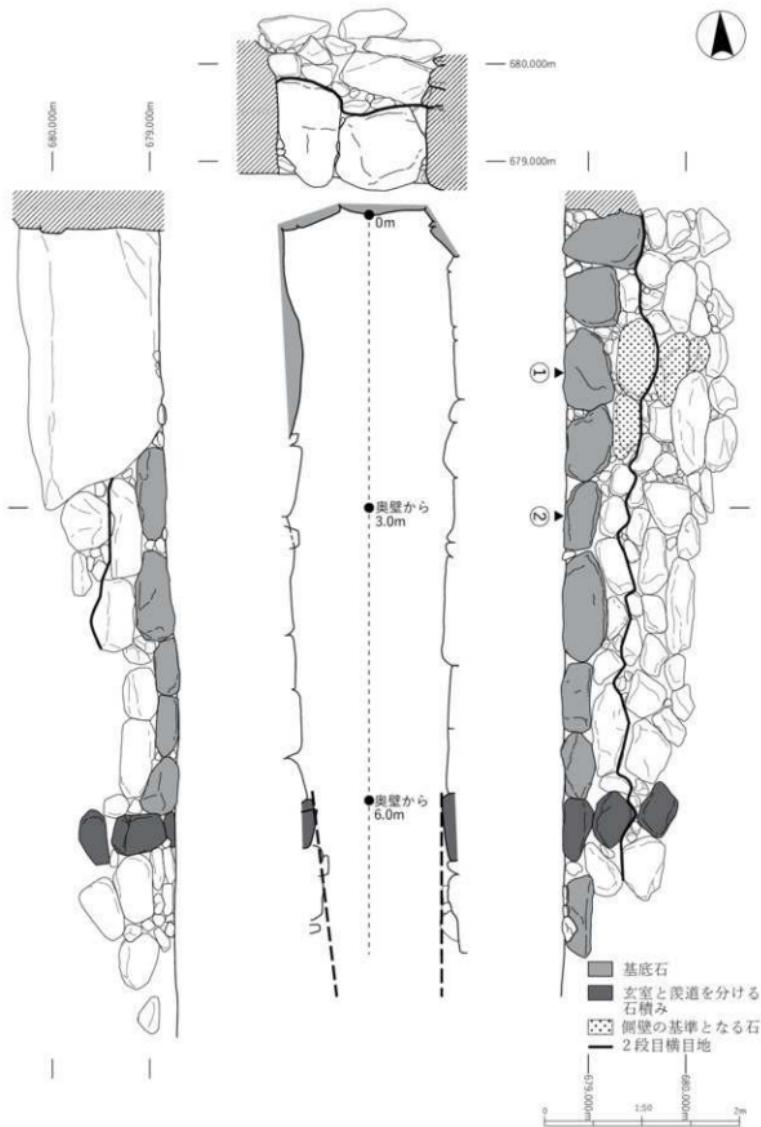
第14図 土層断面図



第15図 石室実測図



第16図 石室床面・断面実測図



第17図 石積み構造図

## 2 遺物検出状況

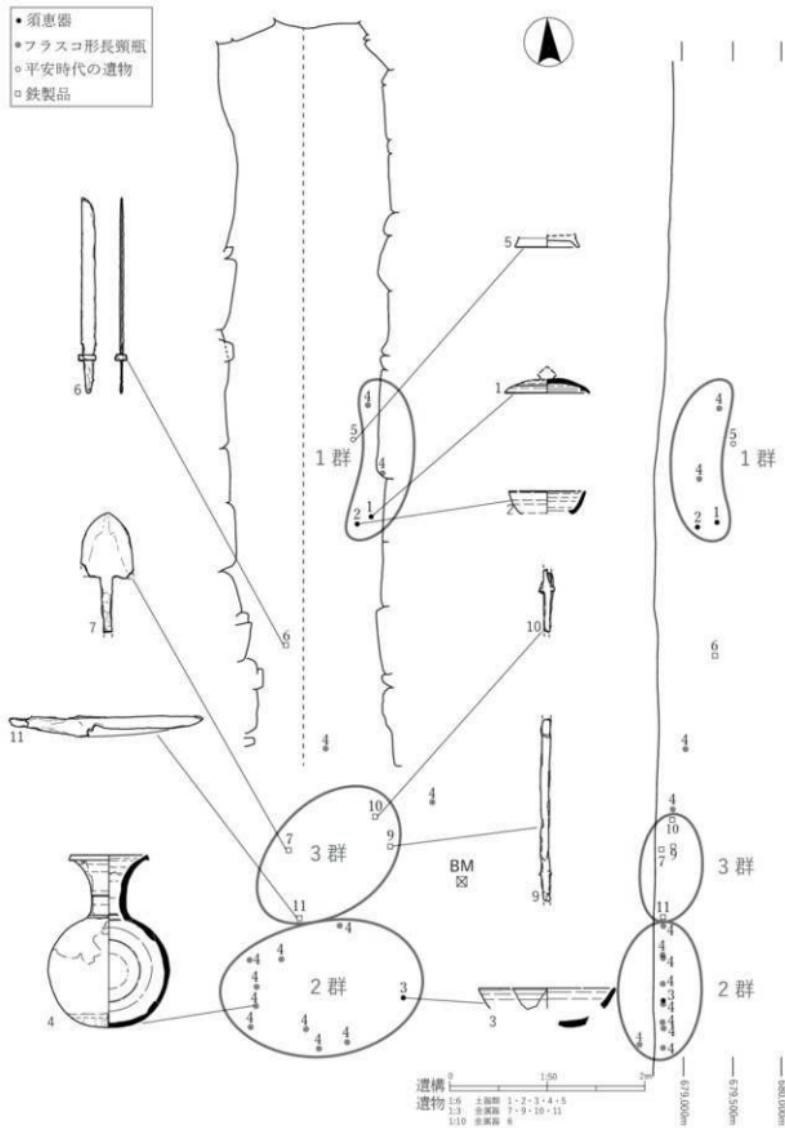
古墳にかかわる遺物は、須恵器、土師器のほか、金属器として直刀、鉄鏃、刀子があり、墳丘からは縄文時代の石器が出土した（第18図、写真図版2・3）。須恵器は個体として識別されたもの4点、土師器1点で、金属器は、直刀1点、鉄鏃4点、刀子1点、石器は、石鏃1点と剥片が4点である。玉類、人骨は検出されなかった。なお、本節の遺物No.は、第19・20図による。

石鏃と剥片は、墳丘掘削及び精査段階で採取したものである。石室内から出土した遺物の大半は、側壁のないE・Fグリッドに散在する石材付近の下層出土で、石室奥壁から玄室4mの範囲（C5～D5グリッド）には1点の遺物も検出されなかった。この出土状況から、初葬・追葬時の埋納位置をとどめているものないと判断した。遺物分布は、出土地点から土器類を2群、金属器を1群の計3つの群と単独出土の土師器と直刀に分けることができた。ここでは閉塞石の位置と石積みの違いからGグリッドを境界としてC～Fグリッド内を玄室、G・Hグリッドを羨道・前庭として区分した。

①群は玄室内、玄門に近い東側壁寄りからの須恵器壊蓋1、壊身2とフ拉斯コ形長頸瓶4の破片2片である。壊蓋は一部が側壁積石間の隙間から数片に割れて検出され、側壁からやや離れた埋土内に壊身破片があった（写真図版3）。フ拉斯コ形長頸瓶の破片もほぼ同レベルから側壁に沿うように出土した。

②群は、羨道側壁が途切れたH～Iグリッドの前部下層に散在する須恵器で、フ拉斯コ形長頸瓶4の10数点の破片と破損の著しい須恵器壊身3からなる。フ拉斯コ形長頸瓶の破片は、2.2mの巨礫より北側の中形・大形石材とともに埋土下層から小破片として複数出土した。遺物は、砾下からは検出されず、砾群の崩落もしくは置かれた段階以後の散乱であることが確認できた。

③群は、羨道入り口付近の80～100cm大の数個の砾の周縁に鉄鏃と刀子の4点がばらばらに検出された。散在砾との関係は土器②群と同様で、砾下からの出土はない。単独出土の金属器として、直刀1点がある。出土地点は、小砾と黒褐色土で覆われた西側壁寄りで、50cm大の丸石が70×50cmの楕円砾に乗る状態であり、丸石周辺の掘り下げ時に直刀の切先が検出された。直刀は、丸石下の楕円砾上から、刃部を西側壁に向け、切先を開口方向に、主軸と並行するように置かれていた。埋葬段階の副葬とするには不自然な状態であったが、羨道部を閉塞する段階に意図して移された可能性も考えられた。単独出土の土器として、玄室の上層から土師器高台塊5がある。平面分布では石室内であるが、埋土が窪んで堆積した上層からの出土であった。



第18図 遺物出土状況

## 第6章 遺物

出土遺物は、須恵器、土師器、金属器、石器で、小破片以外は全て図化・図版掲載した（第19・20図、写真図版4・5）。

### 1. 須恵器・土師器

須恵器は、坏蓋1点、坏身2点、フ拉斯コ形長頸瓶1点の計4点、土師器は、壺1点が出土した。このうちフ拉斯コ形長頸瓶には、同一個体の未接合破片が4点ある。

坏蓋1は、摘み部を欠損するが約2分の1が残存する、内面にかえりをもつ蓋である。口径は10.4cmで、器形は天井部にわずかな平坦面をもち、緩やかな丸みをもって口縁部にいたる。口唇部及びかえり部の作り出しはシャープで端部が尖っている。器厚は0.2~0.5cmと、極めて薄く精緻な成形である。内外面ともロクロナデが施され、外面には所々に深い線条痕が観察される。砂粒のない精選された胎土で、にぶい黄色の色調である。

坏身2は、底部を欠損し胴部の約8分の1が残存する。口径は9.4~10.0cm、器高2.8~3.0cmに復元され、小形で口縁が直立する箱形の器形を呈する。内外面ともに丁寧なロクロナデが施されている。にぶい黄色の色調で、胎土と焼成が坏蓋1と同一である。

坏身3は口縁部約6分の1と、剥落が著しく複数の破片となっている底部3分の2程度が残存する。口径16.8cm、底部との接点はないが器高は7.5cm程度に復元される。全容は不明であるが、口縁部が底部から垂直に立ち上がり外傾する器形が想定される。器壁は内外面ロクロナデが施され、底面にはヘラ切りが観察できる。胎土は精選され、灰白色の色調である。

フ拉斯コ形長頸瓶4は口縁・胴部3分の1が残存する。口径9.4cm、頸部と胴部の接合部直径が5.0cm、頸部最小径が4.4cm、胴部最大径15.0cm、器高21.2cm、頸部長7.5cmである。頸部に1条の沈線が巡り、口唇部を折り返して幅0.6cmの平坦面を作り出している。口縁部内面、頸部から体部にかけて自然軸が付着している。体部にカキ目はなく、回転ヘラケズリとロクロナデが施され、残存する底面中央には緩方向の沈線が1条巡る。口縁・頸部は内外面にはロクロナデが施され、体部と頸部の接合部内面に突出部を残さない丁寧な処理がなされている。体部内面には、球形状に造作するための粘土板を塞ぐ接合痕が明瞭に残されている。胎土には白色・黒色礫が混入しているが緻密で、暗灰黄色の色調で焼成も良好である。

土師器壺5は、体部と内面は剥落により欠損するが、底部3分の2が残存する。高台端部が先鋭丸味の形状で、「ハ」字に開く器形である。底面に回転糸切り痕を残し、高台と底面外縁はロクロナデにより仕上げられている。白色・黒色礫を少量混入する胎土であるが緻密で、器面が橙褐色、良好な焼成である。

坏蓋1は摘み部を欠損するが、宝珠形摘みと想定され、天井部に平坦面を持つ台形状の器形となる。精緻な調整を施した小形の蓋である。この坏蓋は、口径10cm程度の法量であり、天井部がやや低くなる形状から7世紀後半に位置づけられる。坏身2も口径10cm以下の小形で口縁が直立する器形である

ことから、壺蓋と同時期のセットとなる。須恵器壺身3は、口径16cm、高さ7.5cmをこえる大形の壺で、摘みと口縁を折り曲げた壺蓋とともに出土する壺Gで、7世紀後半～8世紀前半に比定される。フラスコ形長頸瓶4は頸部径が小さく、頸部長が比較的長い定型化した器形であり、第1次成形痕を残さない調整等から7世紀中頃～後半に位置づく。また、緻密な胎土とやや黒味がかった色調から東海地方西部からの搬入品とみられる。これらの須恵器4点は、7世紀後半～末期の古墳稼働期の埋葬儀礼に用いられた土器と捉えられる。一方、土師器塊5は、器形と法量、調整等の特徴から平安時代中～後半に該当する。埋土上層出土でもあり、古墳閉塞以降の祭祀行為の痕跡と理解したい。

## 2 金属器

金属器は直刀1点、鉄鎌4点、刀子1点が出土した。

直刀6は、閉塞石の上から切先を開口方向である南に向け、鍔を付けた状態で検出された。剥落が数か所にあるが良好な状態で、完存する。全長40.1cm（刃長30.1cm、茎10.0cm）である。刃幅3.0cmで、径3.5×2.4cmの鍔を装着し、茎尻近くに鉄製目釘が残されている。棟区は垂直な段差が残る直角闊で、刃区は腐食によって不明瞭であるが、緩く内弯する形状が想定される。茎は茎尻に向かって幅が狭くなっている。

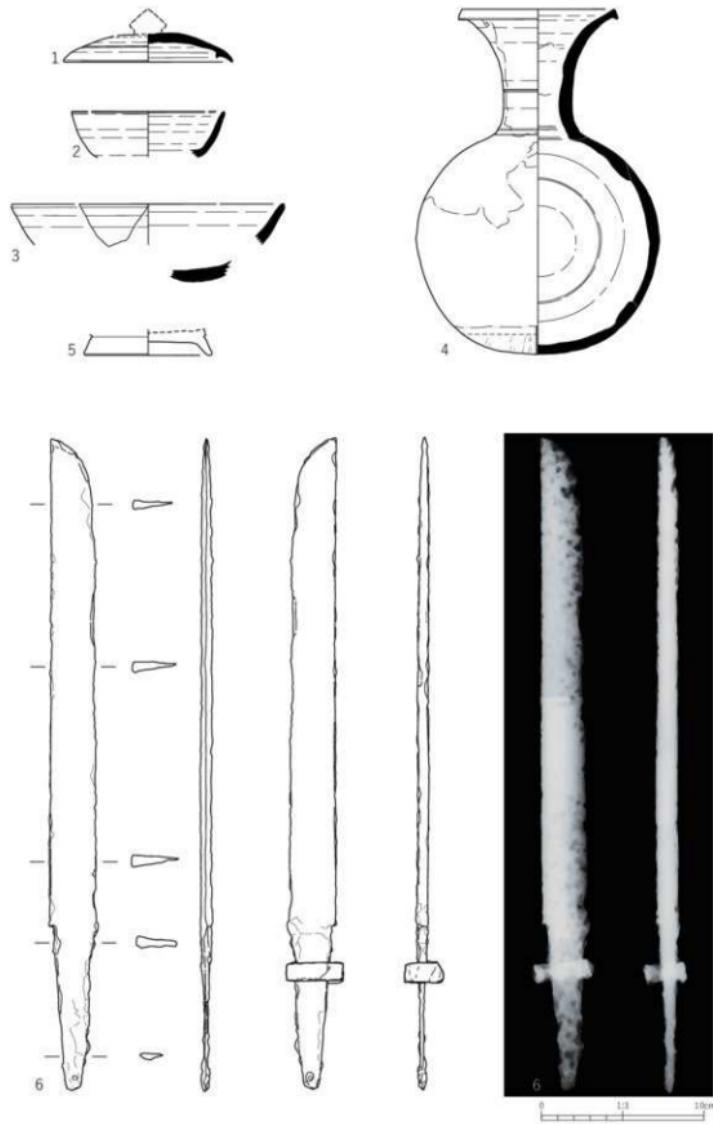
鉄鎌7～10は、鎌身部2点と茎部2点の計4点が出土した。鉄鎌8～10は、漢道もしくは前庭部にあった櫛を囲むように検出された。出土状況から、鎌身8と頸部9もしくは茎部10が同一個体の可能性がある。鉄鎌7は、鎌による剥落が著しく、鎌身間の一部と茎部間及び茎部が欠損する。片側の鎌身間が不明瞭であるが、平根式脇抉三角形式鎌で、鎌身長4.0cm、幅3.2cmと大形である。鎌身8は、検出時に鎌による膨張と剥落が著しかったが、保存処理によって長さ2.3cmの鎌身の片側に刃部が確認され、片刃式とした。9・10とも長頸鎌の柄部で、鎌身と茎端部を欠損する。鎌による膨張と歪みはあるが形状は明確である。いずれも茎は棘状闊で、茎部断面は方形もしくは隅丸方形である。

刀子11は、前庭部中央にある大形磯付近下層から検出された。刃部と茎端部が欠損し、鎌による膨張が著しかった。刃部長7.8cm、茎4.1cmで茎は茎尻方向にやや先細りとなっている。棟区は直角で刃部は撫区である。切先は丸く残り刃部断面が三角形状であるので、刃部が研ぎによって内弯する形状であった可能性もある。金属器は、この6点のほかに、器種不明の小破片が4点出土している（第5表12～15）。

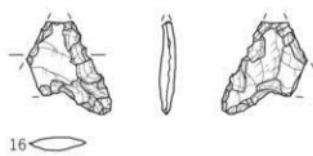
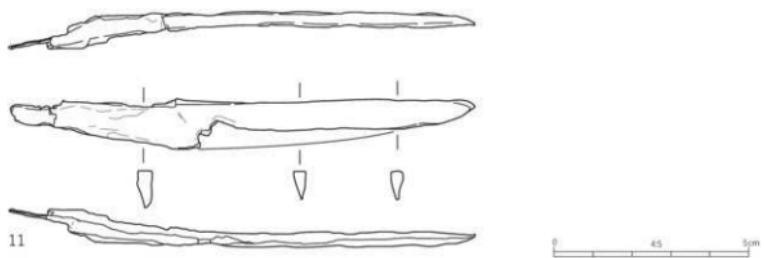
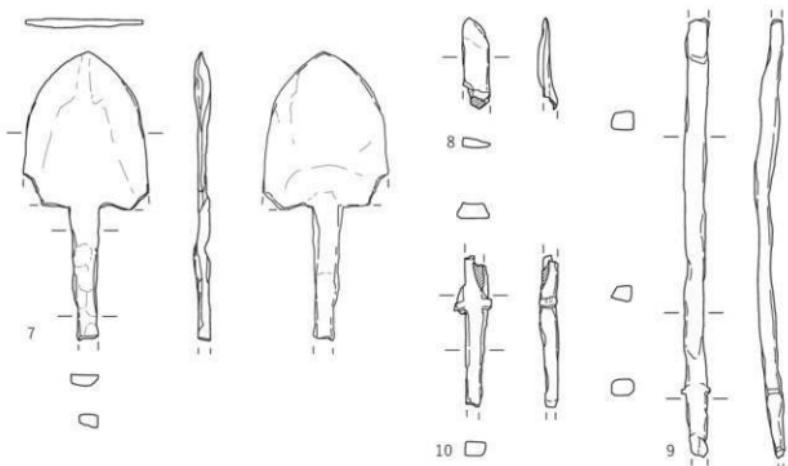
金属器の出土地点は直刀6以外、全て石室外からであり、副葬品となる武具が埋葬時の位置から人為的に移動されていたことは明らかである。直刀6は、全長40.1cmと実用的な短刀に属する法量であり、8世紀前後の可能性が高い。鉄鎌7は、丸味のある先端と、五角形を思わせる平面形状となる平根系鎌で6世紀末以降、7世紀代の所産である。棘状闊の長頸鎌とあわせると、鉄鎌は7世紀代に位置づけることができる。

## 3 石器

石鎌1点、黒曜石の剥片4点、頁岩の剥片1点が墳丘掘削及び精査時に出土した。西山山麓に分布する縄文時代の遺跡の所産であると推測できる。



第19図 出土遺物 1



第20図 出土遺物 2

第4表 出土土器類観察表

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
	須恵器	壺蓋	石室 No.2	(1.8)	(10.4)	-
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
1	にぶい黄色 (25Y 6 / 4)	砂粒等いっさいない緻密な胎土、焼成良好	ロクロナデ、所々深い縫合痕残る、上部回転ヘラケズリ	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	体部完存 (つまみ部欠損)	つまみ部欠損、痕跡有、土器 No.2と同じ作り、7世紀後半～末				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
	須恵器	壺	石室 No.19	(2.8)	(9.4)	不明
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
2	にぶい黄色 (25Y 6 / 4)	No.1と同じ、砂粒等いっさいない緻密な胎土焼成良好	ロクロナデ	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	口縁～体部下半 1 / 8	No.1と同じ作り				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
	須恵器	壺	前底部 Na13	口縁(2.5)、底部(1.3)	(16.8)	不明
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
3	灰白色(25Y 7 / 1)	緻密で不純物なし	ロクロナデ	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	口縁～体部下半 1 / 8 底部 1 / 8	底部に至る破片が4～8点あるが、外面が磨滅、口縁との接点なし 底部は口縁と同一個体であるが磨滅が著しい、底部はヘラ切り				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
	須恵器	プラスコ形長頸瓶	石室 No.121ほか	21.2	(9.4)	-
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
4	暗灰黄色(25Y 5 / 2) 灰黄褐色(25Y 7 / 2)	2 mm 大の白色・黒色・ 練混入白色繙は 5 mm 大 のものもある 、比較的緻密な胎土、焼 成良好	ロクロナデ、体部下半～ 底部にかけてケズリ調整、 頭部を中心全体的に自 然釉かかる、頭部に一条 の沈線	ナデと球状の器形を閉める 輪積み痕残る		
	残存度	備考				
	口縁～底部 1 / 3	自然釉 球状の器に頭部を接合、東海西部産、頭部径(4.2)、体部径(15.0)				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
	土師器	壺	墳丘 No.21	(1.4)	不明	(7.8)
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
5	橙褐色～褐色(5 YR 6 / 8)	白色細粒・黒色粒の練混入 比較的緻密	ロクロナデ 高台貼り付け痕有り	残存せず不明		
	残存度	備考				
	底部 2 / 3	平安時代、底部回転系切り、中心部に糸切り痕残す、縁辺にナデ調整で糸切痕ナデ消し				

第5表 出土金属器観察表

No.	器種	出土位置	重量(g)	残存長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
6	直刀	石室	244.7	40.1	3.0	0.7	棟区3cmあり、刃区不明 茎部に1か所0.3cmの目釘穴残存
	鍔	石室	8.7	3.5	1.3	0.4	
7	鉄鎌(鎌身)	前庭部	6.1	4.0	3.2	0.4	短頭鎌、鎌身の裾欠損、左右非対象であるが、逆刺は左右あったと推測 頭部は薪による膨張著しい
	鉄鎌(茎)	前庭部	6.1	3.4	0.8	0.4	
8	鉄鎌(鎌身)	前庭部	0.6	2.3	0.7	0.3	長頭鎌、鎌身部破片、片刃
9	鉄鎌(茎)	前庭部	6.9	11.2	鎌茎部0.5 圓部0.7	0.5	長頭鎌、輪状闊、鎌身部と鎌茎部欠損、 鎌身は片刃か、茎部断面四角、茎部隅 断面丸
10	鉄鎌(茎)	前庭部	2.3	3.8	鎌茎部0.8 圓部1.0	0.4	長頭鎌、輪状闊、輪状闊部鋸により膨 張変形、鎌身部と鎌茎部一部欠損
11	刀子	前庭部	8.5	11.9	1.3	棟区0.3	刃部と茎部の端欠損、棟区は残存す る、茎部が反る形状、左へ弯曲する形 状、茎部に木質部の付着なし、鎌によ る膨張あり
12	不明	前庭部	2.0	2.6	1.0	0.4	写真図版のみ
13	不明	前庭部	1.4	2.5	1.4	0.3	写真図版のみ
14	不明	前庭部	1.0	1.9	1.0	0.3	写真図版のみ
15	不明	前庭部	1.1	1.6	0.9	0.5	写真図版のみ

第6表 出土石器観察表

No.	遺構	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
16	墳丘周辺	一	石鎚	頁岩	1.9	1.8	0.35	0.7	黒曜石など剥片4点 縄文時代の遺物混入

## 第7章 調査の総括

### 1 横穴石式石室の構築と墳丘盛土

C2号墳は、西山山麓の標高679m、東に傾斜する斜面に立地し、穂高古墳群の中で高位に位置する。山林として土地利用された古墳周辺の土層は、基盤となる花崗岩風化礫を主体とする砂礫層上に、黒色土もしくは山水の押出による粗砂層のみが堆積していた。墳丘調査では、黒褐色土が最下層から盛土として、黒褐色土と黄褐色砂礫の混入した褐色土が混在して検出された。この状況からどのように石室、墳丘を構築したのか疑問であった。その最中、令和3年（2021）度に、B27号墳の墳丘調査を行うこととなった。この調査によって、古墳群の墳丘と石室構築にかかる課題のいくつかを解決するヒントを得ることができた。F9号墳、E13号墳の成果と合わせて考察してみたい。

#### （1）F9号墳（ふたづ塚）

穂高古墳群は、國學院大學考古学研究室の考古学実習での精力的な発掘調査によって、課題が整理され、多くの成果をもたらしている。平成21年（2009）から第11次まで実施されたF9号墳調査の中で、石室構築については、「石室構築の際、自然堆積層上面から約70cm掘り下げて、石室壁体の最下段を設置している」（深澤編2017、青木・朝倉編2019）、「石室が自然堆積層である砂礫層を掘り込んで掘方を設け、そこから大型円礫を順に積み上げていく」（青木・朝倉編2019）、「石室背面上には円礫が多量に積まれており、石室の控え積みとしている…（中略）…石室壁体と取り合わない箇所にも礫があることから控え積みとしての機能以外の役割も担っていた可能性が示唆された」、「控え積みが墳丘盛土と平行して積まれ…（中略）…複数繰り返していた可能性が高い」（深澤編2017、青木・朝倉編2019）、「石室と墳丘の構築が並行して行われていたことが判明した」（青木・朝倉編2019）などの結論が導き出されている。

墳丘施設については、「明確な周溝が検出できずに、存否に関しては引き続き検討を進める。周溝らしき落ち込みの存在から、従来の推定より墳丘規模が大きくなる」（青木・朝倉編2019）、「石列という形で第1次墳丘と第2次墳丘とを画していない可能性が高い…（中略）…墳丘は段階的に構築された可能性は残る」（青木・朝倉編2019）、等の所見を得ている。第Ⅲトレンチ下層の黒褐色土4・5層の盛土については「石室掘方を掘削する前に墳丘構築面として一帯を整地するため、旧表土を取り除いた際に発生した黒色土に由来すると考えられる」（青木・朝倉編2019）とし、課題の整理と掘削整地土の利用を示唆している。葺石の有無については、適切な葺石材が検出できていないことから「盛土には土だけでなく多くの石材を使用した」（青木・朝倉編2019）。として慎重な解釈をしている。

#### （2）E13号墳（はまほづか）

古墳は、石室中位まで耕作が及び、墳丘面一帯が耕作地として平坦に整地されていたため、墳丘にかかる調査所見はほとんど得られていない。石室は基盤層を30~50cm掘り込んだ礫混じりのローム層

上に基底石を配置して構築されていた。石室構築には、積石の2段目までローム混じり砂礫が混入したしまりの強い黒褐色土を使用し、裏込めの石はなかった。盛土は石室開口部と東斜面の一部に残され、礫が混入しない黒褐色土と黄褐色土の互層であった。控え積みの礫、葺石に用いられた礫は検出されていない。墳丘面の掘り込みと裾部、周溝については不明であった（安曇野市教委2021）。

### （3）B27号墳

標高630mの別荘地内山林に位置し、周知の古墳として天井石を含め石室及び墳丘の一部が保全されている。墳丘東半分の不動産売買に際し、令和3年（2021）6～7月に、安曇野市教育委員会が調査主体となって、墳丘の範囲確認調査を実施した。結果は、墳丘直径約15m、石室長7.5mであること、トレンチの土層断面の観察から墳丘盛土には、裏込めや控え積み等に一切礫を用いておらず、黒色土と砂礫混合シルトによって構築されていたことが確認された。石室東側壁の外壁面を垂直に掘削した土層は、黒色土層と褐色砂礫を含むシルト層が10層の縮状堆積となって検出された。盛土状況から、石室壁体の構築とあわせて、黒色土と砂礫を混ぜた土塊をブロック状に広げ版築しながら裏込め、壁体補強が行なわれ、盛土を重ねていったと考えた。

### （4）C2号墳

C2号墳の石室と墳丘構築過程を復元しながら、いくつかの課題を整理していくこととする。Cトレーナーで検出した山麓側の基盤層の掘削地点（第21図①）を起点として、自然堆積した黒色土及び粗砂礫混入シルト、さらに基盤を掘削して平坦面（墳丘面）をつくる。起点から約3m地点（第21図②）までほぼ水平に整地し、石室構築のため深さ60cm程度の緩い傾斜の掘削をする。掘り込みは西山麓側と奥壁側に、平面形「T」状にあったと思われる。①地点から約10m東に基盤層の平坦面が途切れる地点（第21図③）までを墳丘整地面とする。東側に石室の掘方ではなく、本古墳が長方形の掘方をもたない石室構築がなされていったことになる。B27号墳の調査でも東斜面方から掘方が検出されず、平坦面に基底石が配置されている。掘方ではF9号墳、E13号墳と異なっている。この第Ⅰ工程で、封土を計画的に進めるため、掘削した土壤を含め周辺土壤を盛土順に分別したと思われる。封土には、構築石材の選別と同様のことだわりがある。

墳丘面と石室面には、礫の混入しない黒色土が20cm前後の厚みで盛られ、転圧によって固められる。北西隅に長さ3.2mの巨石が据えられ、石室の中核となる。恐らく巨石が付近に存在したことで、この場所を選地したと思われる。側壁、石積は、裏込めに礫を用いない、黒色土と砂礫混入シルトで転圧補強する（第Ⅱ工程）。

西側壁の巨石（腰石）との関係を重視して奥壁東に1石の大形礫を縦置きする。右奥壁は、内壁面を主軸と直交させ、巨石からの幅が1.7mとなる位置に据えられる。東奥壁と巨石を埋めるように西（左）奥壁として1石の大形礫を縦置きし、さらに右奥壁から東側壁をつくる大形礫2石を縦置きして、玄室の中核部を構築する。この5石が腰石となり石積みと玄室の拡張が行われていく。東側壁部に10石、西側壁部に6石の基底石を配置する。C2号墳の基底石は80～100cmと腰石になる大形角礫が用いられ、

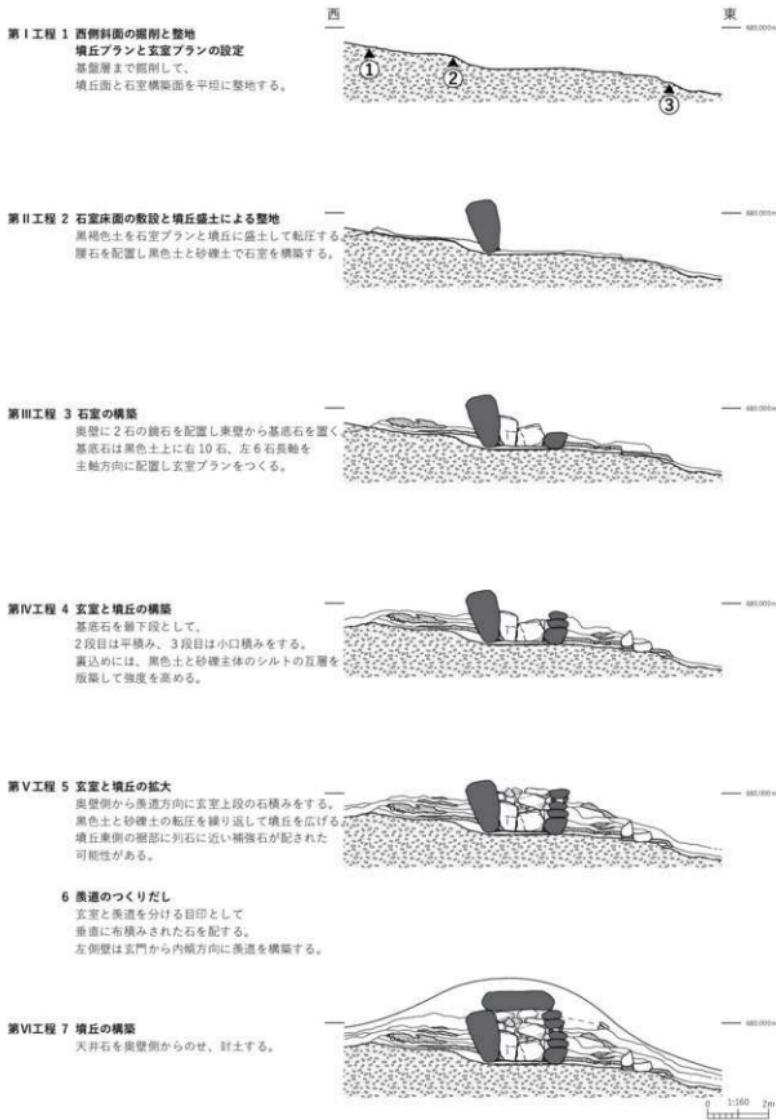
最下部への意識が強調されている。鳥川流域のF9号墳では、長軸50~75cm程度の小ぶりの円礫が最下段から3段目までに用いられ、E13号墳では、長軸75cm前後の扁平な楕円礫を基底石とし短辺50cm程度の楕円礫が2・3段目まで積まれている。いずれの古墳でも裏込めに石が用いられず、黒褐色土を基調とする粘土を用いている（第Ⅲ工程）。

側壁は2段目まで平積み、3段目以上が小口積みとなる。石積された壁体の盛土には、黒色土、砂礫土、砂礫を混入した黒色土、黒色土を砂礫土の大きく4種類が交互に用いられ、転圧、版築される。構築土は、壁体付近で、直径50~80cm程度の塊として叩きしめられ、それぞれの土壤が斑紋となる。おそらく、主体部周辺はバッチャワーク状になっていたと思われる。控え積みはせず、石室中位までの構築と墳丘の拡張が同時に進行していく。この段階で墳丘東斜面の裾部に中形礫を置き、封土保護の列石とした可能性がある。F9号墳では、角礫による控え積みが確認され、盛土内にも大小の礫が混じっていた。B27号墳の壁体盛土は、本古墳と同一で、黒色土と基盤砂礫を混ぜ合わせた粘土の互層によって構築されていた（第Ⅳ工程）。

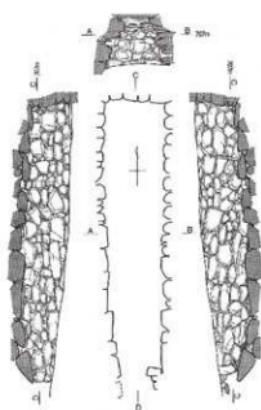
東側壁が主軸となるよう基底石が配置され、側壁として石積みされていく。奥壁から約6m地点を境に西側壁の最下段の石材を中形の扁平円礫として、開口部を狭めるように内側に構築していく。最下段中形礫の上部には大形礫を小口積みする。東側壁は基底石の上に垂直に平積みされた礫が玄門となる。E13号墳の石室平面プランでも、東側壁が主軸ラインの直線上に構築され、西側壁ラインの内傾と小形の石積みに変えるという形態がみられた。この形態はA1号墳とB1号墳にも見られる（第V工程）。

本調査で、石室と墳丘構築について確認できたことは、以下のとおりである。ただし、墳丘の面的な調査は行われていないため、黒色土と黄褐色砂礫土の面的な広がり、封土外護の列石と周溝等の施設については不明となった。

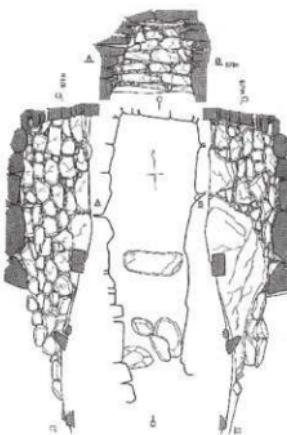
- 1 石室の掘方について、山側を平面「T」字に掘り込んだだけで、東斜面側に掘方をもたずに石室位置と墳丘が平坦面となっていること。
- 2 石室部を中心に黒色土を用いて転圧し、基底石が配置されていること。
- 3 石室は西側奥の側壁にある巨石を中心に、継置きの奥壁が決められ東側壁の順に構築されていること。
- 4 石積みには、裏込めに石を用いないで、黒色土と黄褐色砂礫土の互層を転圧して補強していること。
- 5 上段の石積みに、石による控え積みをせず、黒色土と黄褐色砂礫土の互層を転圧して補強し、石室構築と墳丘構築が一体化していること。
- 6 渓道は西側壁を狭め、小形の礫を用いた石積みに変化させて区分していること。
- 7 墳丘が黒色土と黄褐色砂礫土をブロック状に用いて互層で築かれていること。



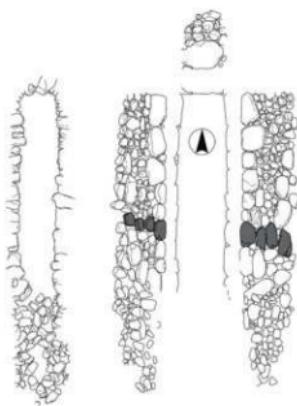
第21図 C 2号塗装石室構築模式図



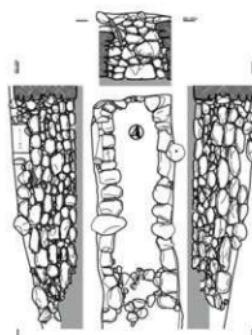
1 A1号墳（陵塚）石室



2 B1号墳（ちいが塚）石室



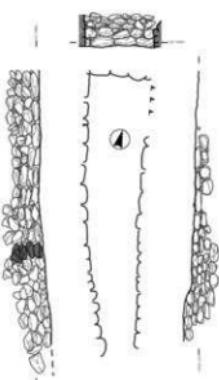
3 G1号墳（上原古墳）石室



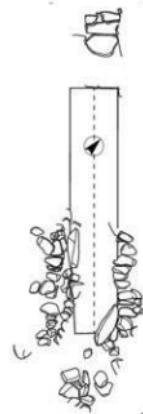
4 F9号墳（二つ塚古墳）石室

1:100 10m

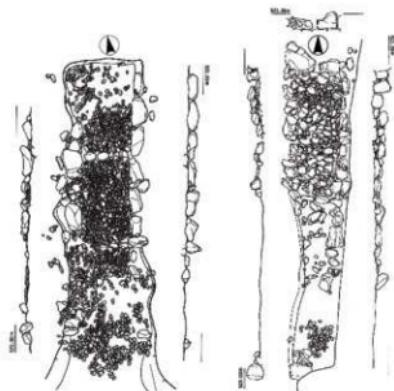
第22図 穂高古墳群と周辺古墳の横穴式石室1



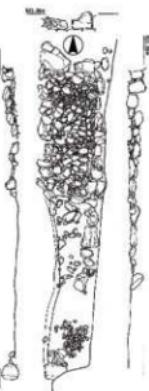
5 E13号墳(浜場塚)石室



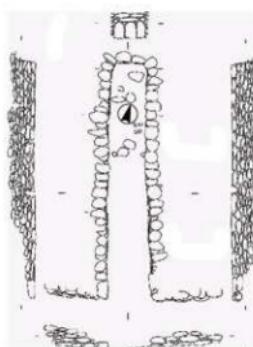
6 B24号墳石室



7 潮6号墳石室



8 潮7号墳石室



9 秋葉原1号墳(松本市新村)石室

1:150  
10m

第23図 稲高古墳群と周辺古墳の横穴式石室 2

## 2 C2号墳出土遺物から見るC群の築造・稼働期と被葬者の属性

穂高古墳群出土遺物の特長として、埋葬遺物に馬具及び武具が数多くあることが指摘されている。特に馬具の中には、6世紀代の飾り馬に使用される杏葉、雲珠、金銅張り金具が含まれるなど、被葬者の属性を探る大きな手掛かりとなっている。一方で、馬具の型式に見合う段階の須恵器を中心とする土器出土が極めて少なく、検出された複数の土器の帰属時期と馬具のずれが生じている。副葬及び供献、祭祀具の組成は、築造→追葬→閉塞の各段階・時期によって、社会の動向や死生観の違いが反映されているもので、特定の器種が欠落した可能性もある。6世紀後半～8世紀前半に稼働した穂高古墳群は、湮滅した古墳を含めると100基余りとなる群集墳である。この群集墳の中で、C群及びC2号墳の築造・稼働時期、被葬者の属性について考えてみたい。

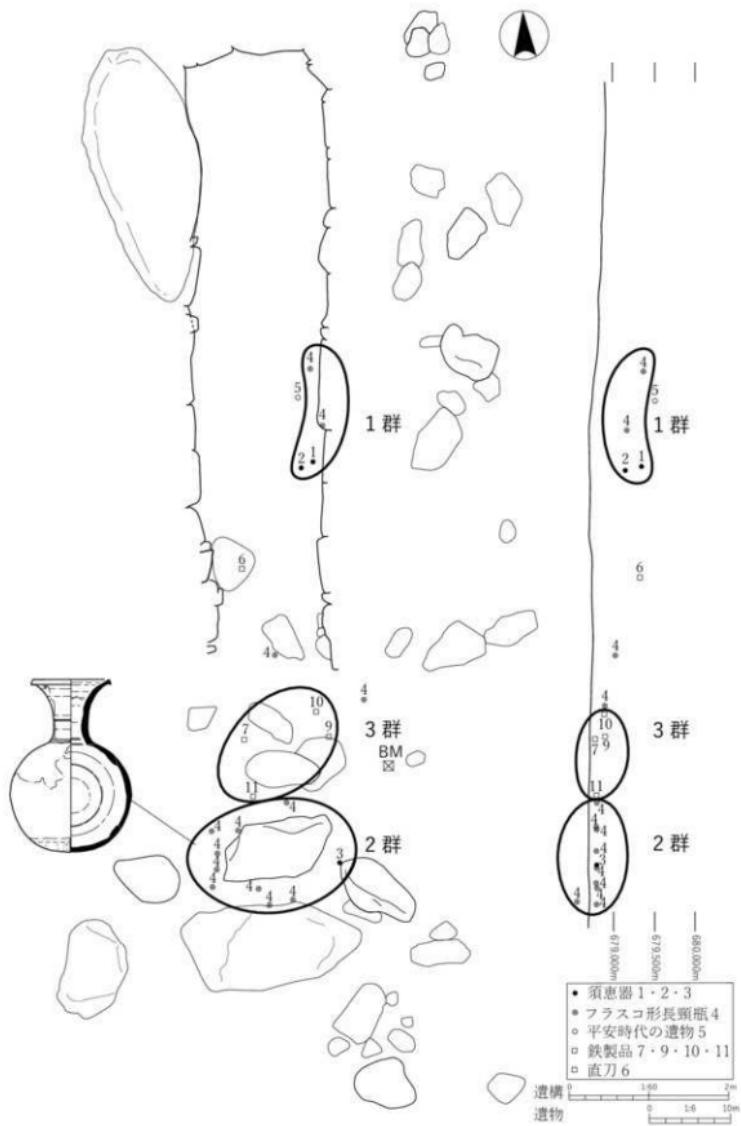
### (1) C2号墳出土遺物からみる穂高古墳群

C2号墳出土金属器は、直刀1点、鉄劍4点、刀子1点、器種不明の金属器破片数点で、馬具及び装身具の出土はない。土器は、小破片となって散乱し、復元できた須恵器フラスコ形長頸瓶1点、坏身Aとかえりをもつ坏蓋A、土師器の高台坏1点が全てで、その他の破片すら検出されなかった。これらの遺物の検出状況を1～3の3群に区分したところ（第24図）、それぞれの遺物群が同一時期、器種、素材別のかたまりであった。この検出状況から、埋葬品の種類・量とともに限定的であったと判断した。C2号墳は、墳墓として7世紀中頃以降、8世紀初頭までが築造から追葬、終焉となり、10～11世紀頃に祭祀行為の場となったと推測した。

本古墳からは、古墳群の特長となる馬具や須恵器の坏蓋B、坏身Bが副葬品組成から欠落している。この要因としては、「古墳の稼働時期と埋葬品の関係」と「被葬者及び被葬者集団の属性」にかかわる事象であると捉えられる。そこで、穂高古墳群及び周辺地域の6世紀後半～8世紀までの横穴式古墳に副葬された金属器の様子から整理してみたい。

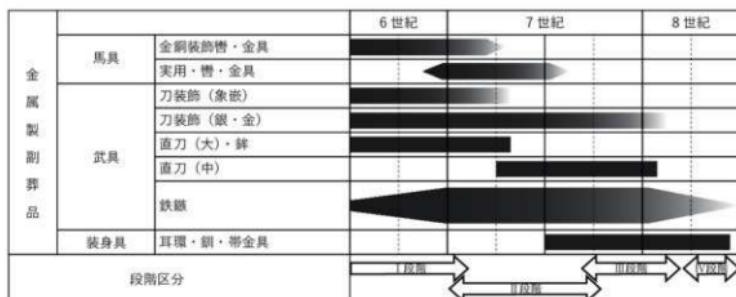
穂高古墳群で、発掘ないしは調査によって遺物の出土状況が確認できた古墳は、B5号墳（金掘塚）、D1号墳（魏石鬼窟）<sup>1</sup>、E13号墳（浜塚塚）、F9号墳（二つ塚）、G1号墳（上原古墳）の5基、過去の記録や所蔵品から帰属する遺物が確定できた古墳は、A1号墳（猿塚）<sup>2</sup>、A6号墳（犬養塚）<sup>3</sup>、A8号墳、B23号墳（祝塚）、E6号墳（狐塚3号）、E7号墳（狐塚2号）の6基である。ただし、発掘調査以外で検討されてきた資料分析では、「金銅装飾品を出土した古墳は、石室・墳丘の規模は大きく、群集墳形成の初期段階に築造され、標高の高い位置に選地し、優位性をもっている」（三木2011）という意識が先行していた面が否めない。また分析対象とした古墳は、穂高古墳群全体の15%にも満たないものであり、データ不足を考慮しなければいけない。

1 D1号墳（魏石鬼窟）の資料について、出土遺物の再検証をしたところ、①坏蓋Iは小破片で天井部までに傾斜が緩い椭形となること、②蓋坏IIは受け部から内側に短い立ち上がりをもつ形態で、口径10cmと小形であること、から7世紀中葉以後、フラスコ形提瓶とした口縁部7・8は、平瓶の可能性が高く7世紀代とされる。③窓口縁は体部形状が不明であるが、口径12cmと大きく開いた内面に段部をもつ長い頭部が想定され、6世紀末となる。未公表遺物も含め検討が必要である。



第24図 出土遺物群区分図

## (2) 出土金属製品と被葬者の属性



第25図 穂高古墳群を中心とする出土金属器にみる段階区分

安塚古墳群、あきばはら 古葉原古墳群では、7世紀後半以降に限定できる埋葬品の調査成果をえていることから、周辺出土資料を参考にして、金属器の副葬品からみた時期区分をした（第25図、第7表）。ただし、須恵器年代が不明の金銅製馬具・装飾大刀については築造・初葬での埋葬品として考え、I～IV段階の区分をした。6世紀後半の古墳構築時期から7世紀前半までを、金銅製装飾馬具・装飾大刀及び大形の直刀が副葬されるI段階とし、A6号墳、B5号墳、D1号墳、G1号墳、松川村の祖父が塚古墳を該当させた。特にG1号墳の六花金張鏡板巻や、B5号墳の雲珠と杏葉、祖父が塚古墳の装飾大刀などは、威信財として被葬者階層が上位であったことを示唆している。7世紀前・中頃～後半は、装飾大刀と素環の実用馬具、中・大形の直刀、長頭鏹を中心とする複数の铁鏹が副葬されるII段階とした。F9号墳では、铁鏹のほか弓羽引金具が出土している。この段階から次の段階を含めて、铁鏹の数量が増える傾向にある。7世紀後半～8世紀初頭は、馬具を副葬せず、小・中形の直刀と長頭鏹を中心とする複数の铁鏹、金・銀の耳環など装身具を副葬するIII段階である。8世紀初頭～前半は、帶金具、耳環などの身の回りの装飾具を副葬するIV段階とした。

C2号墳の出土須恵器（フ拉斯コ形長頭瓶と坏蓋A、坏G）とすり合わせると、初葬は、馬具を副葬しない7世紀後半となる。終焉期は、F9号墳とE13号墳の調査、B5号墳と前の髪古墳出土例などによって検証された、坏蓋B、坏身B、長頭瓶等の供食具を石室入り口部に残す傾向があることを踏まえると、8世紀前半以前が閉塞として捉えられる。C2号墳は、装飾武具、馬具を副葬せず、武具のみを保持し埋葬した段階に築造され、祭祀用の坏類がない時期である8世紀初頭までの範囲に収まり、III段階の中で稼働した古墳となる。穂高古墳群の中では、遅い時期に構築された古墳として位置づけられるが、他支群との階層面の違いを見てみたい。C群で石室状況がわかる古墳は、4基（C1・3・4・5号墳）ある。規格は、C2号墳と同規模の長軸7.0m前後の規模が想定される。穂高古墳群内ではやや大きめの石室であり、規模での格差はみられない。埋葬品については、C群7基から表探を含めて遺物の出土報告がない点や、本古墳の遺物散乱の様子を加味しても、C群全体に金銅製装飾具の副葬がなかつた可能性が高く、馬具と祭祀用須恵器が欠落していたと思われる。この点について、古墳群の中での階

層差は顕著である。7世紀後半に松本地域を含め馬具副葬がなくなる傾向については、被葬者集団の属性によるところと、馬飼の仕組みが、個別集団から地域集団、そして公的な集団に移行するシステムの変化と捉えることもできる。今後の課題としたい。

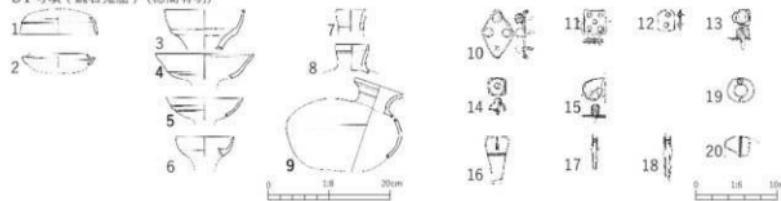
第7表 終末期古墳出土金属器一覧表

名称	金銅製 武具・馬具	馬具	刀・鉾	鐵	武具ほか	工具ほか	装飾品	土器年代
A1号墳 (陵塚)	—	尾銃・鞍韁か	(直刀)	—	—	—	金環	不明
A5号墳 (大義塚)	あり	素環帶はか2・金銅張雲珠・ 杏葉2・鋲具付金具・鍔韁	直刀數本・鷲3	平根系織3	—	—	金環4	7世紀前半
A8号墳	—	(尾銃)	—	—	—	—	(金環)	7世紀前半
B5号墳 (金振塚)	あり	素環板状物3・(尾銃)	柄頭・筋足・鷲3・ 羅、(直刀3)	鉄織數種	—	—	金環2	7世紀後半
E23号墳 (祝塚)と周辺	あり	金張要形飾・(馬具)	直刀1	—	—	—	金環5	6世紀後~
D1号墳 (穀戸鬼窟)	あり	金銅張方形・菱形金具・ 併金具複数	—	斧頭織1・ 長頭織1	—	—	金環1	6世紀末~ p.48註
E6号墳 (狐塚3号)	あり	素環帶1・素環板状1	鉄鉾・直刀9・四 鍔、(銀象嵌鈎)	鉄織	—	刀子	金環 銅鏡	6世紀末~
E7号墳 (狐塚2号)	—	—	(直刀2・鷲)	鉄織	—	(刀子2)	金環	不明
E13号墳 (浜塚)	—	素環板状物1・鋲具・留金具	直刀長2・短1	長頭織2以上	—	—	金環1 銀環去探	8世紀初~
F9号墳 (二つ塚)	—	素環板状1・瓢環板状1・ 鋲具・留金具・鍔金具	直刀1・刀裝具	長頭織30余り	弓弭金具	—	—	7世紀初~
G1号墳 (上原古墳)	あり	六花金張鏡板帶1・ 金張杏葉1・留金具	直刀1	—	金張銀金具	刀子2	金環2	7世紀前半
古城下古墳	—	轡	直刀5	—	—	—	金環	不明
C2号墳	—	—	直刀短1	平根織1 長頭織2	—	刀子1	なし	7世紀中~
瀬古墳群 1号墳 (金山塚)	—	素環帶1ほか	直刀長1	—	—	刀子	—	不明
瀬古墳群 6号墳	あり	—	—	銀張刀裝具	—	長頭織	刀子	—
瀬古墳群 8号墳	あり	—	—	周溝内から多量の須恵器とともに鉄織の頭部・茎・鉄片・銅鏡等が出土しているが、詳細は不明	—	—	—	7世紀後~
上郷古墳	—	(轡)	(直刀)	—	—	—	—	不明
武士平 2号墳	—	(轡)	直刀	—	—	—	(金環)	不明
松川村 祖父が塚古墳	あり	—	(鉾、刀10)・金銅 頭椎頭・鷲・切羽・足金物ほか	—	(鉾)	—	銀環2	不明
麻績村 武士塚	—	—	—	長頭織	—	刀子1	—	7世紀後~
坂北村 武士塚	—	素環板状物1・鎧1ほか	直刀4・鷲2ほか	平根織・長頭 織複数	—	刀子4	金環2 銀環12	不明
安塚5号墳	—	—	直刀3	鉄織複数	—	—	金環1	7世紀後~
安塚8号墳	—	—	直刀1・資金具	鉄織	—	結縛車1	金環4	7世紀末
秋葉原 1・2号墳	—	—	—	平根系織	—	刀子	金環4 鈎蒂金具	7世紀末~

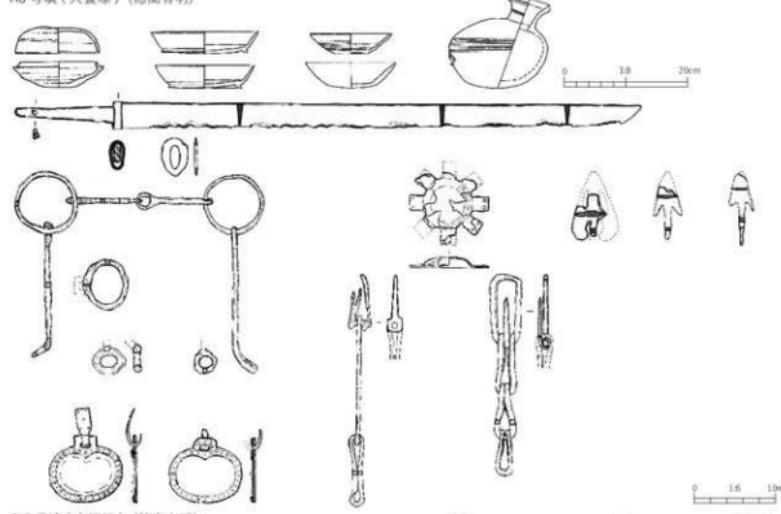
※( )は、文章記載もしくは伝承のみで形状確認ができない遺物、所在不明遺物を指す。

第7章 調査の総括

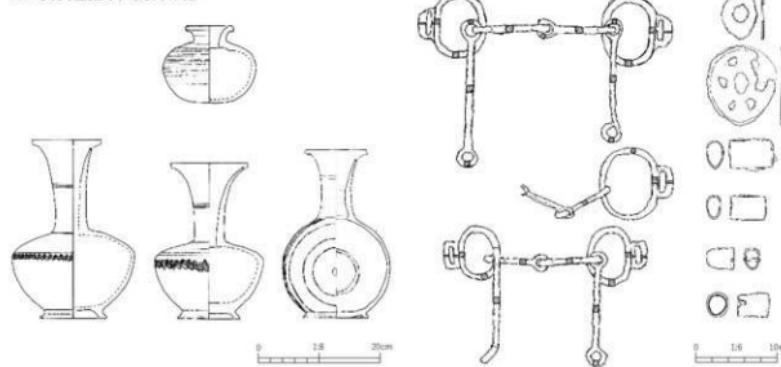
D1号墳(駒石鬼窟)(穗高有明)



A6号墳(犬養塚)(穗高有明)

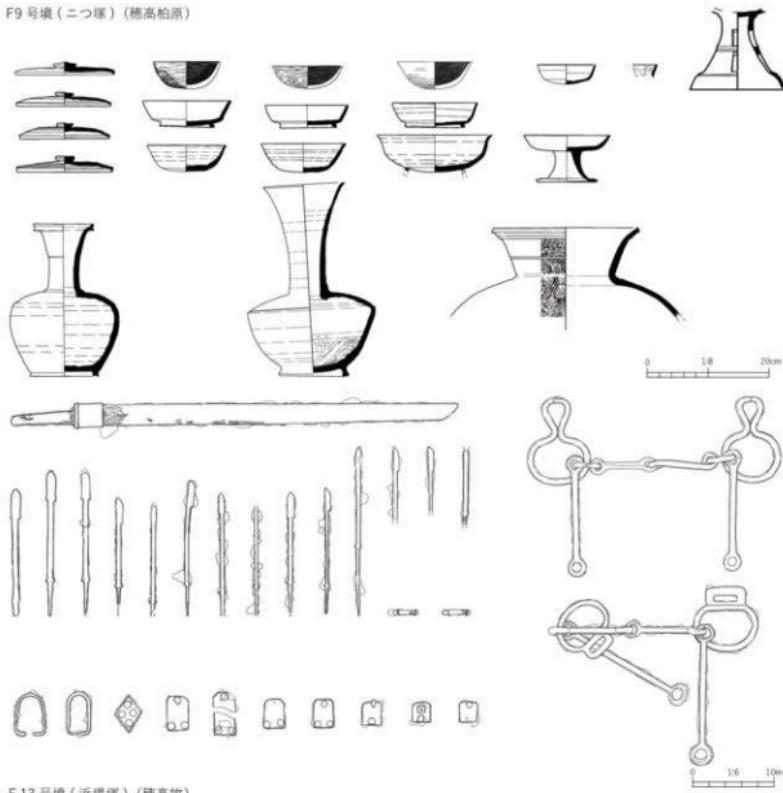


B5号墳(金振塚)(穗高有明)

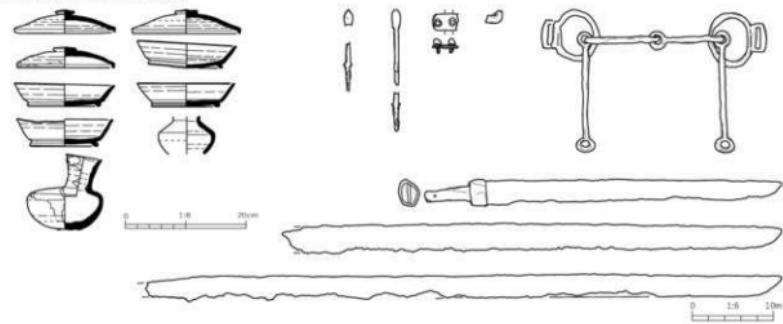


第26図 周辺古墳出土遺物1

F9号墳(ニツ塚)(穗高柏原)



E13号墳(浜場塚)(穗高牧)



第27図 周辺古墳出土遺物 2



調査前の石室状況（南から）



石室奥壁付近の検出状況（南東から）



西側壁の検出状況（北東から）



西側壁・礫石検出状況（東から）



石室前庭検出状況（南から）



東側壁検出状況（南西から）



羨道部付近の東側壁検出状況（西から）

1 調査状況 1



東側壁検出状況（南西から）



床面腰石検出状況（東から）



東側壁検出状況（南から）



腰石・奥壁・床面検出状況（南東から）



前庭部遺物出土状況（マークは遺物出土地点）（西から）



羨道部西側壁検出状況（東から）



直刀出土状況（東から）



直刀出土状況（東から）

## 2 調査状況 2



环蓋出土状況（西から）



鐵鎌出土状況（西から）



刀子出土状況（北西から）



前庭部検出状況（南から）

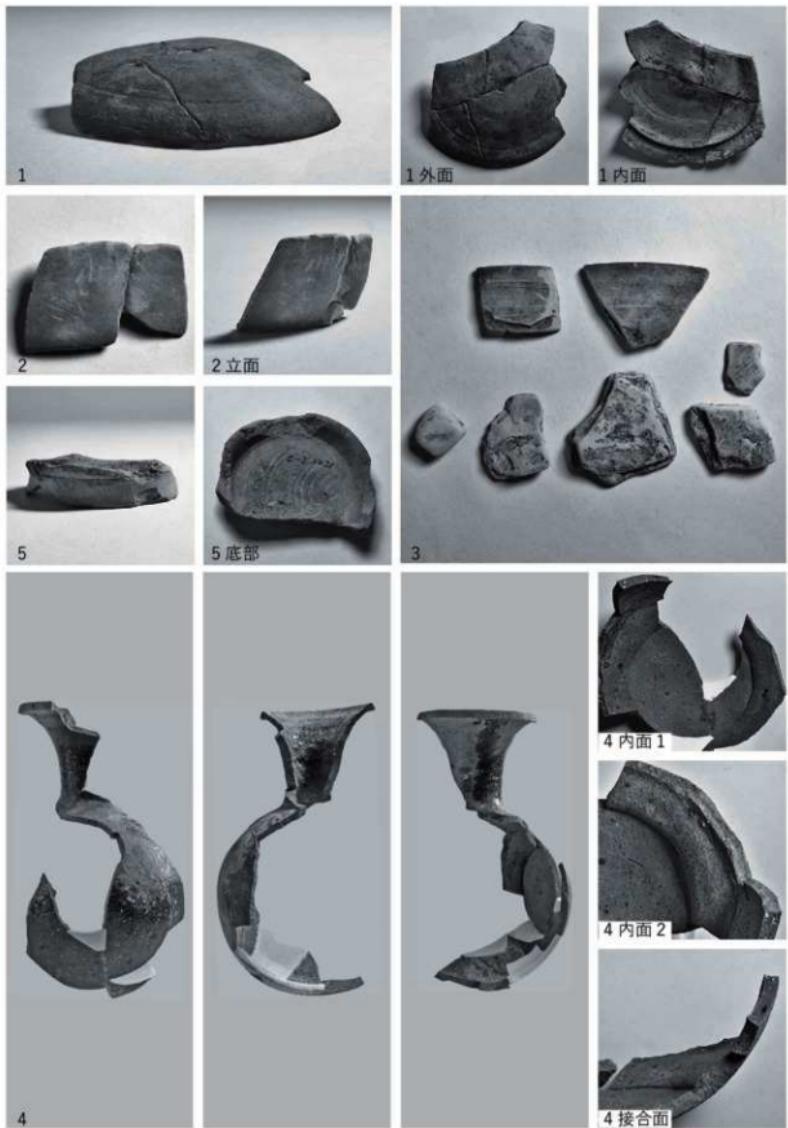


C トレンチ掘削状況（南西から）

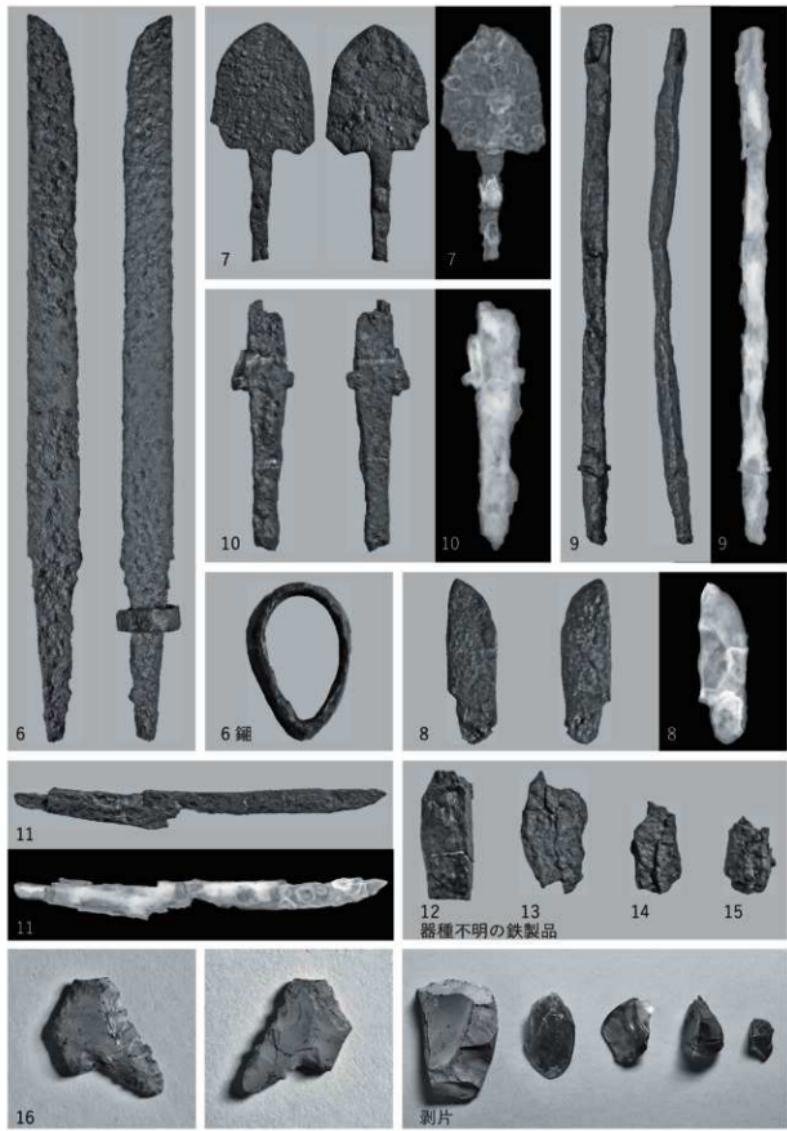


B トレンチ掘削状況（東から）

3 調査状況 3



4 出土遺物 1



5 出土遺物 2

## 引用・参考文献（五十音順）

- 青木敬、朝倉一貴編 2019 「長野県安曇野市穗高古墳群2016・2017年度F9号墳発掘調査報告書」國學院大學 文学部考古学実習報告第55集 國學院大學文学部考古学研究室
- 愛知県史編さん委員会 2015 「愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系」 愛知県
- 明科町史編纂会編 1984 「明科町史」 上巻 明科町史刊行会
- 明科町教育委員会 1991 「ほうろく屋敷遺跡—川西地区県営は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一」 明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1995 「上生野遺跡—生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一」 明科町の埋蔵文化財第5集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1998 「桜坂古窯址—主要地方道穂高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告一」 明科町の埋蔵文化財第5集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 「潮神明宮前遺跡—明科町総合福祉センター建設に伴う緊急発掘調査報告書一」 明科町の埋蔵文化財第8集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2002 「栄町遺跡—「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査一」 明科町の埋蔵文化財第6集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2005 「潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書一」 明科町の埋蔵文化財第13集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2013 「明科遺跡群栄町遺跡（第3次）」「平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書」 安曇野市の埋蔵文化財第6集 安曇野市教育委員会 pp.30-116
- 安曇野市教育委員会 2014 「明科遺跡群栄町遺跡（第4次）」「平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書」 安曇野市の埋蔵文化財第7集 安曇野市教育委員会 pp.15-58
- 安曇野市教育委員会 2015 「穂高古墳群G1号墳（上原古墳）第3次・第4次発掘調査」「平成25年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書」 安曇野市の埋蔵文化財第8集 安曇野市教育委員会 pp.19-78
- 安曇野市教育委員会 2016 「芝宮南遺跡—穂高南小学校ブール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」 安曇野市の埋蔵文化財第10集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2018 「穂高神社境内遺跡I—新地高文所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書一」 安曇野市の埋蔵文化財第14集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2019 「潮神明宮前遺跡3—安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に伴う第3次発掘調査報告書一」 安曇野市の埋蔵文化財第18集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2020 「三枚橋遺跡7—店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書一」 安曇野市の埋蔵文化財第21集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2021 「穂高古墳群E13号墳（浜坂塚）1—は場整備事業の伴う第1次発掘調査報告書一」 安曇野市の埋蔵文化財第23集 安曇野市教育委員会
- 池田町誌編纂委員会 1992 「池田町誌」 歴史編I（原始～近世） 池田町
- 池田町遺跡詳細分布調査団 1994 「池田町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書一」 池田町教育委員会
- 岩崎卓也、松尾昌彦、松村公仁 1983 「有明古墳群の再調査」「信濃」35-11 信濃史学会 pp.32-60
- 桐原健 1991 「第2章第3節 古墳時代」「徳高町誌」 徳高町誌刊行会 pp.57-99
- 桐原健 1992 「信濃に観る横穴式石室墳最終末の姿相」「長野県考古学会誌」 第67号 長野県考古学会 pp.39-51
- 桐原健 2014 「附編 安曇郡に観る古墳と寺院」「長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書」國學院大學文学部考古学実習報告第50集 pp. (1) - (7)
- 小山奈津美 2020 「信濃松本平南部における横穴式石室」「横穴式石室の研究」 同成社 pp.181-193
- 猿田文紀 1931 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」「信濃考古学会誌」 2-5・6 信濃考古学会 pp.168-171
- 猿田文紀 1933 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」第14輯 長野県・長野県教育委員会（所収 1974 「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告」第4巻 長野県文化財保護協会 pp.67-80）
- 高橋透 2015 「6～7世紀のシナにおける東海産須恵器の流通」「信濃大室積石塚古墳群の研究IV—大室谷支群ミナゴロ単位支群の調査一」 明治大学文学部考古学研究室 pp.1-26
- 豊科町誌編纂委員会 1995 「豊科町誌」 歴史編・民俗編・水利編 豊科町誌刊行会
- 豊科町教育委員会 1987 「菖蒲平菖蒲平窯跡群—77kV 安曇野作業所送電線に係る埋蔵文化財報告書一」 中部

電力株式会社、農科町教育委員会

農科町教育委員会 1992 「吉野町館跡遺跡一県営は場整備事業農科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書  
一」 農科町教育委員会

農科町東山遺跡調査会 1999 「筑摩東山一ノ山・菖蒲平窓跡群発掘調査報告」 農科町教育委員会  
直井雅尚 1994 「松本市安塚・秋葉原古墳群の再検討」「中部高地の考古学IV」 長野県考古学会 pp.277-305

中島豊晴 1976 「穂高町塚原F1号墳調査概要」「長野県考古学会誌」25 長野県考古学会 pp.55-57

長野県南安曇郡 1923 「南安曇郡誌」 南安曇郡教育会

深澤太郎編 2017 「長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳発掘調査報告書」 國學院大學文学部考古学実習報告第  
54集 國學院大學文学部考古学研究室

穂高町誌編纂委員会 1991a 「穂高町誌」 歴史編上・民俗編 穂高町誌刊行会

穂高町誌編纂委員会 1991b 「穂高町誌」 自然編 穂高町誌刊行会

穂高町教育委員会 1970 「穂高町の古墳—穂高町古墳調査報告書一」 穂高町教育委員会

穂高町教育委員会 1987 「矢原遺跡群（馬場街道遺跡）一県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査  
報告一」 長野県農科建設事務所、穂高町教育委員会

穂高町教育委員会 2001a 「穂高町他谷遺跡一県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告  
書一」 穂高町教育委員会

穂高町教育委員会 2001b 「穂高町一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡、穂高水系による開発沢、上原古墳一  
担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う発掘調査報告書一」 穂高町教育委員会

穂高町、穂高町教育委員会 1989 「穂高町古墳特別展図録 穂高町の古墳群とその人々」 穂高町、穂高町教  
育委員会

堀金村誌編纂委員会 1991 「堀金村誌」 上巻（自然・歴史） 堀金村誌刊行会

堀金村教育委員会 1988 「神沢遺跡、田多井古城下遺跡、そり表遺跡」 堀金村の埋蔵文化財第1集 堀金村教  
育委員会

堀金村教育委員会 2005 「堀金小学校付近遺跡一小学校の下に埋もれていた平安時代のムラー」 堀金村の埋蔵  
文化財第2集 堀金村教育委員会

松川村誌編纂委員会 1988 「松川村誌 歴史編」 松川村誌刊行会

松本市教育委員会 1979 「松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書」 長野県中信土地改良事務所、松本市  
教育委員会

松本市教育委員会 1983 「松本市新村秋葉原遺跡緊急発掘調査報告書」 松本市文化財調査報告 No.26 長野県  
中信土地改良事務所、松本市教育委員会

三木弘 2006 「有明古墳群の再検討（2）—魏磯鬼窟古墳の再考を通じて—」『長野県考古学会誌』118 長野  
県考古学会 pp.179-193

三木弘 2011 「古墳社会と地域経営」 学生社

三木弘、寺島俊郎、西山克己 1987 「長野県南安曇郡穂高町所在魏磯鬼窟古墳について」『信濃』39-5 信濃  
史学会 pp.59-83

三郷村誌編纂委員会 2006 「三郷村誌Ⅱ」 第2巻歴史編上 三郷村誌刊行会

水野敏典 2013 「金属器の型式学的研究 ⑤鉄鎌」「古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年」 同成社  
pp.63-71

南安曇郡誌改訂編纂会 1968 「南安曇郡誌」 第2巻上 南安曇郡誌改訂編纂会

吉田恵二、中村耕作編 2010 「長野県安曇野市穂高古墳群2009年度測量調査・現状確認調査報告書」 國學院大  
學文学部考古学実習報告第44集 國學院大學文学部考古学研究室

吉田恵二、中村耕作編 2011 「長野県安曇野市穂高古墳群2010年度発掘調査報告書」 國學院大學文学部考古学  
実習報告第45集 國學院大學文学部考古学研究室

吉田恵二、中村耕作編 2012 「長野県安曇野市穂高古墳群2011年度発掘調査報告書」 國學院大學文学部考古学  
実習報告第46集 國學院大學文学部考古学研究室

吉田恵二、中村耕作、深澤太郎編 2013 「長野県安曇野市穂高古墳群2012年度発掘調査報告書」 國學院大學文  
学部考古学実習報告第48集 國學院大學文学部考古学研究室

吉田恵二、中村耕作、深澤太郎編 2014 「長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書」 國學院大學文  
学部考古学実習報告第50集 國學院大學文学部考古学研究室

吉田恵二、深澤太郎、朝倉一貴編 2016 「長野県安曇野市穂高古墳群2014年度発掘調査報告書」 國學院大學文  
学部考古学実習報告第52集 國學院大學文学部考古学研究室

## 調査報告書抄録

安曇野市の埋蔵文化財第26集  
穂高古墳群C2号墳1  
宅地造成に伴う第1次発掘調査報告書

---

発行 令和4年（2022）3月31日  
安曇野市教育委員会  
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地  
電話0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会  
印刷 電算印刷株式会社

